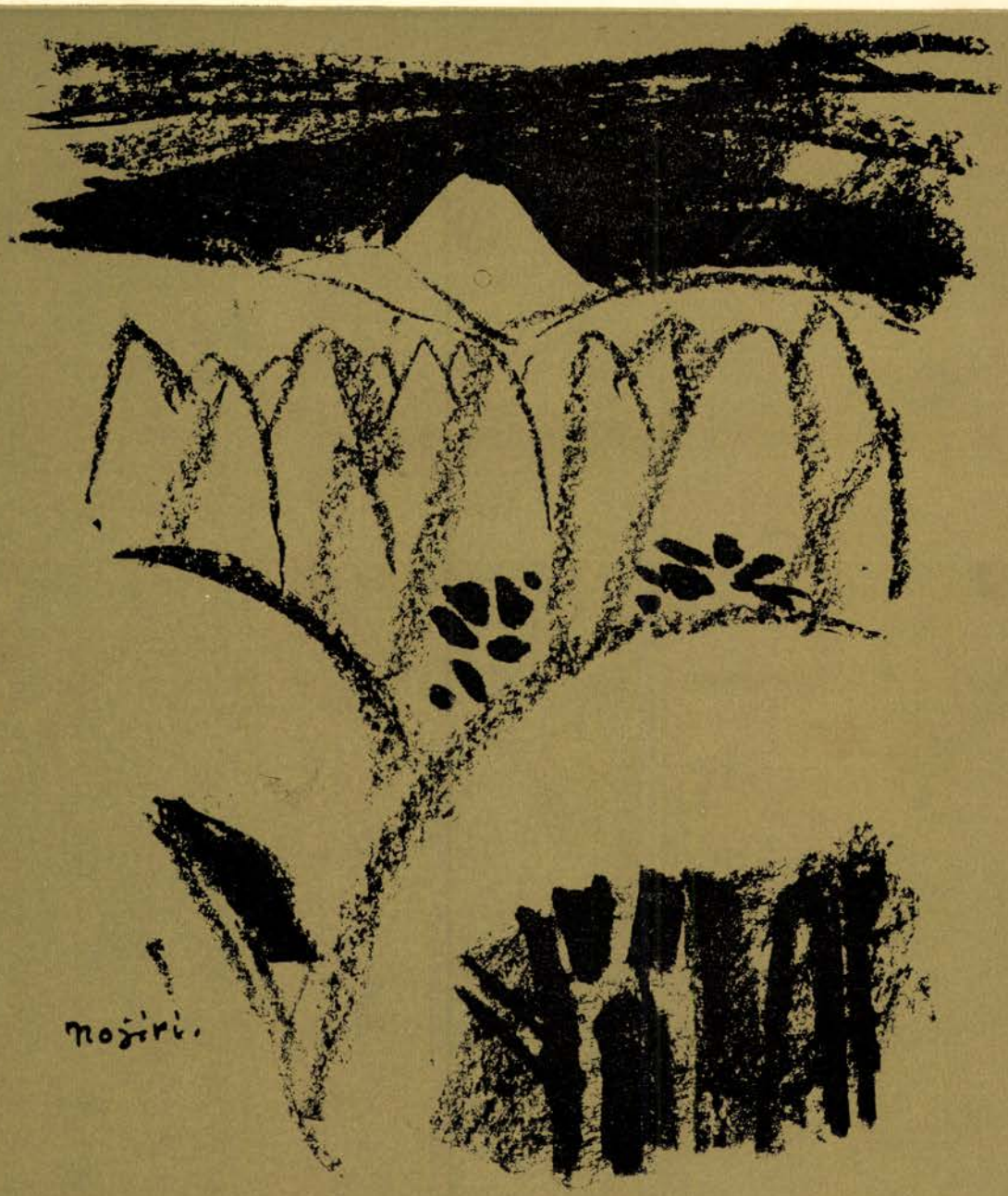
昭和廿二年七月一日第三種郵便物認可　昭和卅六年十二月一日発行卅六年十二月号　（毎月一回一日発行）　創刊大正十三年・通刊四一五号

川柳雑誌



麻生路郎☆主宰

十二月号

No. 415

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

忘年川柳大会

一九六一年のさよなら句会です。
また川雑の顔見世句会でもあります。
一人のこらずご出席くださいませ。

日時 十二月十日（日）正午

会場 大成閣（電話㉗五二三八～九番）
南区大宝寺町五丁目二六
（心斉橋大丸北の辻五〇米北側）

司会 黒川柴香
挨拶 松江梅里

兼題 「ショック」（二句）麻生路郎選
（路郎選に限り一時半〆切）
「歯」（三句）中島生々庵選
「目 尻」（三句）土井文蝶選
「覚 悟」（三句）若本多久志選

席題 三題（当日発表）

柳話 清水白柳

支部対抗戦 各支部選手

雪月花句戦 出席者全員

呈賞 各題三才・五客 路郎選天位に不朽洞賞
支部対抗戦優勝者・準優勝者及び雪月花戦二位の組に川雑賞

余興 出席者有志

会費 百五十円

★投句だけの方は郵券三十円
同封（〆切十二月八日）

★忘年懇親宴―閉会後・同会場で会費五百円

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電・住吉㉜六〇八一

37年新春句会から
市電千日前下車・電車通り東スグ
新会場 自安寺に決定
（1月13日(土)午後6時）

新春本社句会
〃兼題〃スタート
小刻み 虎
横顔

日本盛酒坊

灘の清酒 ニホンサカリ

和やかに まず一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰

不朽洞句帖

麻生路郎

人口論天災だけじゃ減りもせず

（悪質人間撲滅せよ）

用が済んだら殺し屋も消されていた

死刑執行裁判長は飲みに出る

池田池田とショウチウのさかなにし

弁護士も後家の色香にちと動き

汚職とは妻もうすうす知りはじめ

赤線地帯だったところを寒う過ぎ

筋だんねやろと漫才師の伴

デザイナーの間違ったのがはやり出し

川柳雑誌十二月号目次

不朽洞句帖……麻生路郎……(3)
不安な世相の中で……戸田古方……(12)
続・川柳料理暦……水谷竹荘……(33)
軍隊でストをした男……東野大八……(14)

特集　ストあれこれ……(24)
市場没食子・国弘半休・真鍋一瓢・小西雄々・石倉旅風・野村味平・児島与呂志・永松東岸・直原七面山・不二田一三夫

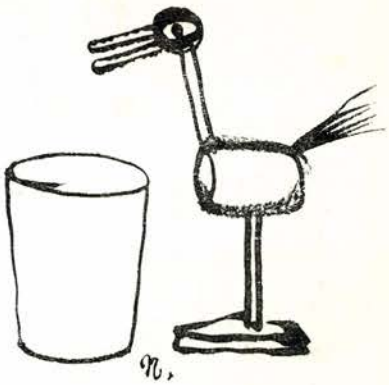
ストと改札……黒川紫香……(28)
名句と難句……麻生路郎……(4)
☆現代柳人録……(35)　★川柳書架……(15)
窓口談義……麻生路郎……(18)
呼び出し電話……直原七面山……(20)

句評リレー……摩天郎・晩晩・味平・晃明……(30)
思い出……新岡回天子……(40)
欧洲とびある記……中島生々庵……(16)
☆不朽洞の人々……貴山氏の巻……(37)　★国産愛用時代……綺史朗……(40)
袈裟御前……冨士野鞍馬……(29)

★

川柳塔……麻生路郎選……(6)
同舟近詠……諸家……(13)
近作柳樽……麻生路郎選……(20)
金泥集……北川春巣選……(20)
各地柳壇……麻生葭乃選……(40)
★柳界展望……(36)　★不朽洞会から……(41)
「くもの巣」……尼緑之助選……(37)
一路集　「新型」……西いわを選……(38)
「休診」……吉田圭井堂選……(39)
★柳樽室……(46)　▼ペンの散歩……(46)

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘



川柳 名句と難句

麻生路郎

〔二四三〕

死亡三負傷十五を見て飛ばし

（多久志）

府庁や警察署の前に、交通事故の死亡者や負傷者の件数が日日掲示されている。おそろしい交通事故を少しでも、なくそうとする警告だが、それを見ても、彼等運転手は自分だけは死なぬもの、自分だけは負傷せぬものと一人ぎめにきめ、違反承知のスピードでふっ飛ばすと詠んだもの。運転手気質をズバリとつかんだ句だ。

〔二四四〕

タクシーに乗れば市電が邪魔になり

（春巣）

大都市では交通マヒ時代となった。市電が珠数つなぎになり、その前後左右にタクシーがギッシリ詰まって動きがとれぬありさま。

こんな時、タクシーに乗っていると、市電の大きなズウタイで行くてをふさいでいるように思うというのである。そして、タクシーがギッシリ詰まって市電の行くてをふさいでいることには思い及ばないと自己本位を諷した句である。

〔二四五〕

じゃ僕もと嫌なの一口申し込み

（敬太）

「君もドヤ、買っといても損はいかんぜ」と先輩から云われると、本心はイヤなんだが、あいつはオレが親切に云ってやったのにと云われるのがイヤさに、「じゃ僕もと」一ト口申込んだと云うのである。

何を申込んだのか判らないが、気の弱い男には、ハッキリと断りきれない、そうした場合がたしかにあるものだ。その心理状態をつかみ出して見せて呉れたのがこの句だ。

〔二四六〕

真ッ先に死ぬのは何時も歩であって

（好祐）

この句の「歩」は将棋用語である。軍隊で云えば一兵卒の資格だ。将棋対局の最前線に並べられたのがそれだ。だから真先に死ぬのは、いつも歩だということになるのである。

この句は将棋の歩について語っているが、そのウラには人生のあらゆる面において、弱者がギセイとなって生を断つことを諷しているのだ。そこにこの句の生命がある。

〔二四七〕

西成界わい

ライターの火で証文は灰にされ

（満潮）

「ヨシ、たしかに受けとった。」と兄貴は証文を、ライターの火で灰にしたというのである。普通だったら、証文に消印をして本人へ返えすところを、本人の眼の前で、しかもライターの火で燃やしたところに環境と人物が躍動していて面白いと思う。タッタ十七音字で、かくまでに、人物と情景を描き出した手腕は凡手ではない。

〔二四八〕

マスカット貴族のような艶の青

（舟遊）

マスカットをこんなにまでも美しく詠んだ句は珍しいと思う。ズバリとマスカットの性質を描出して余すところがない。「貴族のような」がよく利いている。

〔二四九〕

将軍の多くは床の中で死に

（清生）

乃木将軍のように自刃したり、山本元帥のように戦争中、機上で亡くなられる方は稀れで、多くは床の中で死ぬが、それは将軍としてはいかにも残念なことであろう。はなばなしく戦死を謳われたかったであろうのに、実際はその殆んどの将軍は床の中で死んでいるというのだ。これは一つの発見である。

〔二五〇〕

全市停電むかしはこんな星月夜

（一三夫）

全市が停電した。フト空を見上げると星月夜だ。昔はいつもこんな星月夜か仰げたんだなあと懐古的な気持に襲われたのである。全市が停電したばかりに、都会人である作者も、斯うした感傷的にならざるを得なかったのであろう。

〔二五一〕

ポリオには赤い白いはいうとれず

（草右）

いとしごが小児麻痺にかかると、その父母のなげきは大きい。生ワクチンをソ連が送ってやると云えば、常日頃は赤だ赤だと毛嫌いしているソ連ではあるが、赤いとか、白いとか云っていられない。早速送ってもらいたいという親心を詠んだものである。ポリオ（小児麻痺）は小児に起る麻痺性疾患で、脊髄性小児麻痺と脳性小児麻痺とあるそうだが普通は前者を指すとのことだ。

「赤」は各国共産党や労働組合が人民革命の標識として赤旗を用いているので、それ等の国や労働組合を指しているのであるが、この句の場合はソ連のこと。従って白というのは米国をはじめとしての自由主義諸国のこと。

〔二五二〕

背チャック一太刀浴びた疵に見え

（光郎）

新奇を好む女性の嗜好を迎えて、デザイナーが背中にボタンを付けたものだが、そのボタンの代りにチャックをつけたのであろう。それをこの句の作者は「一太刀浴びた疵に見え」と観たのである。なかなかユーモラスな観方で、カンタン久しゅうする次第だ。

〔二五三〕

知性などふみにじられて村に住み

（白香）

生じっかインテリなので、村に住んでいると万事に敬遠されるのは、まだいいとして、何かにつけて、黙殺されたり、ふみにじられたりすると云うのである。とかく浮世は住みにくいと云う訳だ。

〔二五四〕

ピンポンの腕を旅館で妻が見せ

（藤波）

たまたま夫婦で旅に出る。ホテルの一夜娯楽室にピンポン台があったので、旅のつれづれに、ラケットを握ったところが、妻君なかなかの腕前だ。女学生の頃、卓球選手をしていたとは聞いていたがまんざらウソではないらしい。

〔二五五〕

三曲合奏木立から月視野に入る

（水客）

それは静かな夜だった。三曲の合奏がはじまった。何気なく、庭の木立の方を眺めると、大きな月が木立を透して視野に這入ったと云うのである。ただそれだけのことではあるが、何んとも云えない感興が湧きおこったのだった。「月視野に入る」は少しく気取った表現ではあるが捨てがたい句だ。

三曲というのは邦楽の演奏形式で箏、三味線、尺八の合奏。

〔二五六〕

傘さげて相合傘のにくらしさ

（花村）

「あんた一本でいいわね」と寄り添うてゆく。かた時も離れられないのであろう。この雨に一本の傘はさげているのだ。

「チェッ。ばかにしてやァがる」

と雨やどり組がそしること、そしること。柳樽から抜け出たような古調の句だ。

〔二五七〕

遅配頻り料金不足だけ届き

（主井堂）

近ごろの日常生活で神経をイライラさせるものに郵便の遅配がある。就職採用の通知が面接日に着かなかったので就職をフイにした例さえある。

この句は遅配が頻りなのに料金不足の郵便物だけがキッチリ着いたのを皮肉ったのである。

〔二五八〕

飲むよりは安いとウールせびられる

（蟠蛇）

ショーウインドーの前に立ち止まった細君が、夫とウインドを七分三分に眺めながら、

「あんた、あんた」

と云う。この「あんた」は夫にとっては死の灰よりもこわい。

「わたし、あのウールの着物が欲しいの、買ってもいいでしょう？」

「おれのサラリーを考えてくれ。ウール一枚だって容易じゃないよ。」

「でも、あんたが飲むよりは安いんですもの、買って頂戴よ。」

と、夫の痛いところを衝く。このところ婦唱夫随でなければおさまらない。軽い穿ちの句だ。

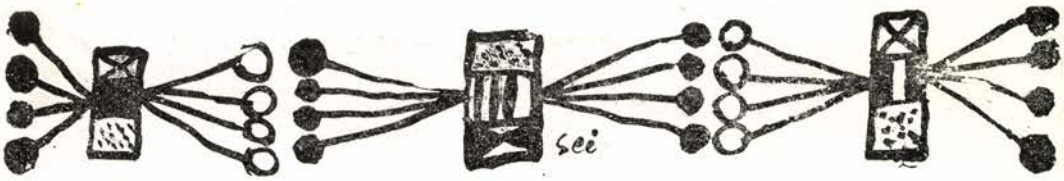
〔二五九〕

ライターを見兼ねマッチを貸してくれ

（仙山）

パチ、パチ、パチと音ばかりして、一向に火が点かないライターへ、横からヒョイとマッチを貸してやる風景をよく見かけるが、自分がタバコを喫うのではなく、気の利いたサービスをするつもりのライターの持主のてれくさそうな顔を見ると、一寸気の毒な思いがする。

スマートな、しかも気の利いたサービスをするつもりのパチ、パチ、パチが不発に終り、サービスがサービスにならなかったマ抜けさ加減が、いかにもユーモラスに感じられる。



奈良県　上田翠光

病んでても女女の線で寝る
惻惻と病軀に秋の風透る
うすもののどぎつさ女体こぼれそう

大阪市　市場没食子

薬学会出席で北海道へ

乗継ぎの羽田でやあの顔に合い
機内での鮎ずし味も乙でよし
快適な旅も機翼が邪魔になり
景色どころか雲ばかり見て千歳着
北大のポプラ並木も通っとき
汗の出ぬ北海道で焦けて来た
牛乳もそばも北海道の味
学会をサボッて行った登り別
湖水だけ巡り札幌へ舞い戻り
観光のためのマリモを見て帰り

アイヌの娘いいえあれみなアルバイト
旭川いよいよ帰る切符出し

西宮市　若本多久志

消防車小火(ボヤ)でがっかりして帰り
捧銃されホロにがし軍国心
ホステスというのは鼻が上を向き
姉女房年の違いを派手に着る

大阪市　正本水客

鼻にしわ寄せて抽象画をみてる
抵抗するように煙は軒を離れない
病人の機嫌は飯を食うという
日曜日あまりに高い空であり

高槻市　丸尾湖花

面影が呼ぶから受話器また握り
恋人を奇術のように変えて来る
橋筋はふたりの道にしてくれず

大阪市　西　いわを

行動を共にして嘘をでっち上げ

大阪市　北川春巣

本読まな思うてる間に秋が過ぎ
相場もう首相の言葉信じない
人間ドック外の嵐を聞きながら
釣り池は他人のように押し黙り

ハワイ　羽佐間柳葉

マスコミの筆に浮いたり沈んだり
盲愛は親を泣かせる子に育て

堺市　吉田圭井堂

対策も持たず被災地視察団
養老院がおすやないのとうそぶかれ

孫入院す

割り込んで呉れては困る逝く序列

下関市　国弘半休

売春婦夫の酒代かせぐのみ
愛情に白髪ひけ目を感じてず
娘心信号違反がしてみたい

山口県　長野井蛙

大物で贈った方だけ罪になり
気の利かぬ下戸に挟まれ酌いでのみ
末席の手酌は妓が待ち切れず
廻り椅子歯の浮くような世辞にあき

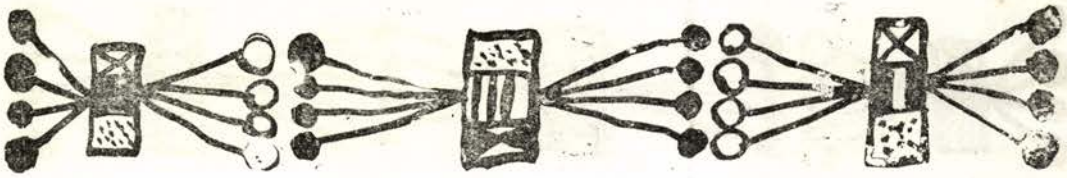
岡山県　直原七面山

宿題の仕上げヘパパが休まされ
娘が嫁って家は嵐のあとのよう

鳥取市　河村日満

三鴨美癸氏を憶う（三句）

支那服の妻の句があり君若く



奢られっぱなしのままもなつかしや
僕へすぐ酌ぎ手になってくれた君
婦人会こんどは宝塚行きかいな
豊中市　足立春雄

不快指数汗にまみれた夏のメス
駅前のテントに盆を知る暮し
倉敷市　木村千容

南無阿弥陀観音様の目がきれい
はてな用意の辞あったけど
鼻白む少女のような古女房
加賀市　野村味平

つまらない前歴などを聞きたがり
たべ物はどうのと山の湯につかり
大阪市　木村水洞

なかほどのとこで汚職はけりがつき
憲法にある主権者に職がなく
株で損出来る身分にまだ遠く
病床へ良妻ぶりを発揮する
酒の味まだまだ慾は捨てられず
高槻市　福田丁路

不細工な出来で人気のある案山子
洒落っ気の多いおっさんベレー帽
大阪市　真鍋一瓢

夢よもう一度お女将のスラックス
ぐずの癖におだてりゃ膝へ手をかける
大阪市　後藤梅志

暴落を金のある者だけ騒ぎ
にこっともせぬ郵便がもの足りず
物を言うと怒る大工で任かせとき
スターリンに一杯くったのも忘れ
気がついてよかった老いの習字する
米子市　小西雄々

口論が夫婦に絶えぬ株を持ち
特急で特急の事故寒く読み
再会の握手が痛いバーの隅
大阪市　山川阿茶

台風よ遠路御苦労とも云えず
そろばんが入って恋の味気なさ
大阪市　金井文秋

儲けたら残ると女房貯めもせず
株よりも野菜暴落せんかいな
決起大会鉢巻もろたから締める
その部屋のムードをかもすいい女
中古の自動車（くるま）一台頼んどき
加賀市　那谷光郎

お経聞く行事は欠伸ばかりして

黒板に先生やきとり食べていた
選挙違反寄ってた蠅が叩かれる
下関市　桜川不水

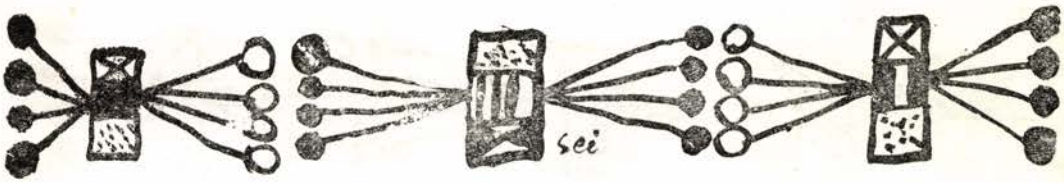
社長より貫禄のあるデブ社員
衣更えに手を添え合うも老夫婦
案山子やや倒れ天下の秋となり
出雲市　尼　緑之助

遠慮なく尿し天気も賞めておき
立板に水お隣りをこきおろし
子をみんな出して旧家も二人なり
大阪市　水谷竹荘

ほらだとは知ってて仲居如才なし
女客いちいち味のことにふれ
恐いものなし素人には勝てず
鳥取市　杉谷湖山

恋とや言わん胸病む人と知りながら
自家用車隣りのレジャーも乗せた事故
空の青水爆なんか知らぬ青
京都市　大鶴喜由

反抗を止めて巻きつく腕となり
十七才法が悪いとまくし立て
秋深し忘れた娘から便りが来
東京都　山根白星



因業な背なへ金庫の半開らき
青筋を眉間に月給前を耐え
自転車と歩き近か過ぎ離れ過ぎ
短気とは会社の誰も信じない
ハイド氏になる夜ハンチングを真深か
まだ渋い柿と侍従は申し上げ
砲列をしいて恐怖の赤い羽
恙がなくやすめと二重橋が昏れ

奈良県　飯　降　白　香

忍従も限度があるとBGは
迷惑をかけじと老のひとりすみ

奈良県　西　辻　竹　青

好きなのが来たのか妓落ち付かず
たくらみがあるのか妓くささない

養子吉典の死に就いて（四句）

死んだのも知らずか暑中見舞呉れ
小使い銭いつも持ってるタチなりき
真理には勝てぬときっぱり拒絶した
つまったら母校を訪えよワシが居る

岡山県　福　島　鉄　児

屋上の恋就業のベルですみ
秋風へ考え深い娘に変り
炎すえる背中早くも秋を知り
万一の金まで使い金送れ

岡山市　服　部　十　九　平

長靴で元将校がデモの指揮
菓子箱がまた無駄だった発表日

岡山県　大　森　娯　句　楽

老たれど議席につけば頭冴え
海賊と云うバーが有り優しい娘

西宮市　若　林　草　右

北海道学会出張（二句）

バスも舟もマリモマリモの日がつづき
さい果の釧路は道から霧が立ち

機上にて

歩けそうな雲々々の太平洋

広島県　山　田　季　賛

月賦のテレビへ子供の机買いかねる
盲判もらうになんとひまがとれ
並木道赤いセーターの娘が二人

岡山県　田　村　藤　波

老いらくの恋は懐炉が二つ要り
遠足の大きくよけたダンプカー
売れ残りですよと老嬢先手うち
港町の平和定刻に鳴る汽笛

児島市　木　田　恵　二　朗

愚夫愚妻またもあげ足子に取られ
しとやかに嘘をつくのも社交術

京都市　松　川　杜　的

五十路ようやくに蛙の子と分る
鈍行も楽し駅売そばの味

倉敷市　松　村　万　古

別離とは悲し玩具の電話買う
膏薬のように眠むたい布団剝ぎ
口惜しいが太刀打ち出来ぬ相手なり
蜂の巣と同じ暮らしか団地族

岡山市　津　田　麦　太　楼

なつかしや豆秋さんも禿げていた
ふところへ御飯こぼした老哀れ
河豚の味松茸の香も聞くばかり

堺　市　高　崎　雄　声

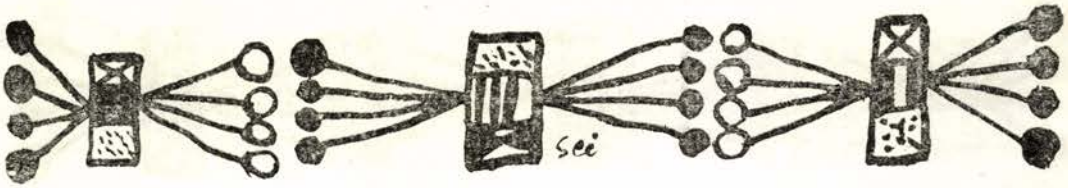
晩酌をのめる身分にまだならず
銀行の使いはうれし我カネたらずとも

島根県　藤　井　明　朗

日曜の子連れをじっと靴磨き
男対男夜霧に嵐呼ぶ
共稼ぎ貯金ますます面白し

岡山県　永　松　東　岸

寝たままで院長さんは見送られ



退院を見送る顔を確かめる
坊さんへ酒好きが来て相手をし

倉敷市　野田素身郎

定期券の期限も同じ共稼
満二歳そろそろテレビの感化うけ

大阪市　清水望峰

電化電化月賦を払うのはあなた
初めから摺り寄りうろたえさせて酌ぎ
さりげない様子と云うを演出し

大阪市　木村十悟

過失致死殺され損に似たさばき
並び屋にすごまれキップの列に居る

大阪市　伊達堰子

持って来る釘大きすぎ小さすぎ
幾曲り芒の果の療養所
こっそりと又戻っとる腐れ縁

平城の秋

お茶入れて人なつかしき御陵守
細ぼそとうわなべ小なべ露の道

大阪市　不二田一三夫

空気さえのんびり吸えぬ世とはなり
死の灰の雨とも知らず子が遊び

兵庫県　酒井ひか平

松茸は御座なく柿を送って来

芦屋市　丸川初甫

大盛一丁板場の耳を通り抜け
ひき逃げをされたままです三周忌
遊んでいなはれと炊飯器音を立て
生きる自信街頭易者がつけてくれ

唐津市　新岡回天子

この辺で家でも建てとく五十越え

岡山県　池田古心

台所文化に遠く金を貯め

大阪府　早川清生

文学が物にならずに教師で居
北浜を草履で古い夢に生き
産業史繰れば硝煙匂うなり
語呂合わせのように捨て子は名づけられ
セールスマンの死へ残金がほっとかれ

堺市　辻圭水

判一つ三日も書類眠らせる
台風の日だけ主人のたのもしく
台風へ神だのみより手がなくて

加賀市　中松恒雄

うまい汁吸えぬ書類はほっとかれ
温泉芸者夜毎恋愛しては寝る
残飯を貰って犬の義理堅し

西宮市　小浜牧人

政治家になれる素質のほらを吹く
考えることのたのしさ秋灯下
病床を淋しがらすな蟋蟀よ

池田市　前川左文字

井目を置かせて親の威厳保持
好敵手ハイヒールよりにらみ上げ

岡山県　池上知恵美

貧乏くじ捨猫さえも飼う運命（さだめ）
記憶さえ薄れて涙もろくなり
曼珠沙華面影ばかし追う小道

大阪市　橘高薫風子

女なるかなやこの女優も芸者が似合い
モーニング着た日も顔を見せにくる

奈良市　宮口笛生

第二室戸台風

大木折れるもうあかんなと思い
風速へ何度か観念の目を閉じる

大阪市　西川晃

さわらぬ神にと警察も思うとり
どら声で喚くおとこを淡やめり
雑魚はざこの運命をもちて泳げり
死の灰の谿間に住んでよう笑い
乞食根性もって右翼の左翼のと

鳥取県　田中蛙眠子

心電計までがまともな線ひかず
次男坊の方が田を守る気になって
女房の強さへ長女味方する

美笑を偲ぶ会

雲足の速さ美笑忌黄昏らせ

神戸市　仲　どんたく

資本家へしっぽ振り振り今日を生き
私服着て巡査こんなに好い男
紫が好きな女と秋の夜を

大阪市　本多柳志

浩ノ宮の浩だんねと初対面
事勿れ主義が無口な人になり
会計へよれば一算たのまれる

出雲市　原　独仙

茸捕れる山用捨なくブルトーザ
アンテナの林無理したのも並び

西宮市　樋口舟遊

夜の汽車足にさわった女なり
昆布巻きの昆布に似てる夫となる

新潟県　高野むじな

相談欄優越感のたしにする

大阪市　石倉旅風

おもしろいほど郵便がおくれて来
腹立てぬことを無力とみてとられ
素人のこわさは相場でも儲け
酔うほどに是非善悪をわきまえる

続・西成界わい

大阪市　魚住満潮

昼の風呂オカマが一番先に来る
刑満期生みの親にも見離され
スリとスリ朝をウインクして出かけ
串かつ屋よりを戻した夫婦が来
鶴見橋靴屋の隣りまた靴屋
西成署親の代から世話になり
儲け話しつんぼが耳を持ってくる
五十過ぎまだマルクスを手離さず

愛媛県　村上旭童

曼珠沙華去年踏まれたとこで咲き
菊見事咲かせて置いて皆留守
僕達の呑んだ見事な乳だった
神様と医者にまかせてねるとする

倉吉市　大前鳴恍

一人子のことには神へ手も合わせ
たのもしき恋なりきょうもかばいあい
アイシャドウ親の意見を背なに聞き

神戸市　傍島静馬

打ちつけた板を台風それて行き
引っ越したあとへ台風襲うて来
強情に来た養老院で淋しがり
そろばんを忘れた顔で月見する

笠岡市　木山遠二

老夫婦坐る間へ猫坐り
亡き子思う夫婦の目と目よく出合い
亡き子思う吾れ箸措けば妻もまた
亡き子思う柿は熟れるにまかせとき

大阪市　河井庸佑

口火だけ切らせてその後ほっとかれ
不機嫌さタイプのキーの派手な音

大阪府　谷沢好祐

台風に運動会まで潰される

子は嬉し避難の水筒とも知らず
警官が要ります野球見るのさえ

泉大津市　高津　徹也

祖母の死

おばあちゃんの生きて来た道通夜の客
祖母の死へ父しょんぼりと背を落とす

愛媛県　槇　紫光

長生きの手相交通事故で死に
輸血したほうが早死にしてしまい
キッスしたぐらいで女眠られず

青森市　工藤甲吉

秋はまた秋で楚々たる人となり
女さえどうかと思う色を着る
銭湯の隣りステテコだけで来る
大都会に生まれて犬はつながれる

松江市　小林孤呂二

やぶ蚊自殺死体とは知らなんだ
ダンプカーいよいよ国鉄慌てさせ
きれいな娘秋のムードを生かしている
女秘書つんとすまして嫁きおくれ

松江市　舟木与根一

お互いに恐妻ぶりを肴にし
頬髭の痛さをうっかり女云い
女手で育てる顔に自信あり

豊中市　林　夢虹

砂丘蕭条風の詩を残す
馬に乗る少女リカ子と名を告げり
悲しみをぼくにあずけて妻すやすやと
終日海と語りいたりけり秋

西宮市　山本一傘

チャンバラの好きな夫婦で世話も好き
鉄砲玉のような奴だが足しになり

大阪市　今西生葦

吉井勇京こまやかに詠み残し
人馬鹿にしてるウナ電カネオクレ
京都市　室井八九寸

京すぐき賞めりゃ三度三度出し
秒族も家ではタイムだらしなく
狂いなく来た台風に恐れ入り
鼻唄が台風過ぎた釘を抜く

奈良市　内海敬太

買収をせんかとうどんおごらされ

岡山県　横山一声

サービスをして宣伝をたのんどき
財産も親もいらない子は街へ
墓掘って遠い歴史をふりかえり
酒の値の上った事は父言わず

小松市　関戸宗太郎

プライドを傷つけながら婚期すぎ
歯の女王そうも笑顔をして居れず

石川県　高山涼髪

三本立みたら日曜暮れていき
ヒモがいそうな女にウインクされる

美称市　安平次弘道

倍増へ経済周期が味方せず
「歯には歯」の思想が世界を危機にする

宇部市　平田実男

金でケリつけようてのが気に入らず
ただ酒へ口の自由を奪われる
養鶏家それほど卵食べていず
温泉に来ても刑事のするどい眼

大阪府　高橋尚史

だんじりは自粛酒だけは飲むという
お見舞に借金とりもやってくる
死期なのか苦労をかけた礼を言い
化粧せん方がましやと子に言われ

不安な世相の中で

戸田古方

今晩は台風だとさコスモスよ
恐わい風だったと雀しゃべり合い
機関車も一人で走って見たかろう

豆秋さんの自然への愛情の句であります。

度外れにたくさん地下水を汲み上げたので地面が水にひっつきそうになっている大都会で暮していますと、軒並みに建ち上っていくビルを見ていましても、何だか心配になってきます。豆秋さんならと思いながらものしたのが

御堂筋ビルの重さで重たかろ

といった句想です。

必要プラス・アルファという親切な仕事のできたのはむかしのこと、現に今つくられつつあるすべてのものへの不安はつのるばかりです。

新しい真実がみつかって、それが誰にでもつかえるようになりますと、今までよりは幸せが一つふえたように思えますが、どこかひとの気のつかないところに新しい心配の種が顔を出してきそうな気がしてなりません。このごろつくづく思うことは、何か便利なものができると、これの欠点は何だろうかとすぐ考えるようになったことです。

複雑になればなるほどアン・バランスがひどくなるように思えます。真理なんてえらそうなことをいっても、ほんとうは真理にみえているだけだとか、それを支える大切な何かを忘れてきているんではないかと。とんでもないカマトトの世迷いごとがいいたくなります。

止められるものなら、文明をこのへんでいっぺん止めて、みんなして、じっくり反省してみたいのです。

ことばに絹をきせたような、含んだもののいい方をして気になりますが、要するにこんどのソ連の核実験のことがいいたかったのです。世界中の非難をあびていますが、世界史の出来事としてはそう珍らしいことでもありません。

石のなげ合いをしていた人間の世界に弓矢があらわれたときにも、弓矢が火薬にかわったときにもそうでした。ただ危険にさらされる人数だけが問題になるだけです。

しかし、忘れていただきたくないのは、弓矢が胡弓やバイオリンとなり、さらにハープ・ピアノになっていったことも、火薬が中国の古代以来、もっぱら人をよろこばすための花火、爆竹としてだけつかわれていたということもです。

火薬がはじめて人殺しにつかわれたのは元寇のときで、当時の絵巻を見ますと「てっぽう」とかいてあります。これをつかったのは蒙古人でした。

蒙古人は東洋人ですが、物に恵まれない北方育ちですので、豊かな南とはいろいろな点でちがっていました。北の人々は「とぼしきを憂えず、ひとしからざるを憂う」と申しますが政治力にすぐれており、とぼしきが故に武力をつかう機会も多かったのです。蒙古人が火薬を戦いにつかったのもそんなためだったのかもしれません。蒙古人はアジア、ヨーロッパにまたがる大帝国をつくりましたので、その頃から、西洋人も火薬を知るようになりました。

火薬こそは息のつまるような封建制度をつきくずすはたらきをして、人々がものを自由にいえる民主主義の時代を迎える有力な手がかりの一つになったのです。日本歴史に出てくる長篠の合戦というのは一騎当千の封建武士を足軽の鉄砲隊がもろくももみくずした戦で、集権的な統一体制へ飛び込んでゆく機会となりました。

しかし、北も南もおしなべてアジアはヨーロッパにくらべるとやはり豊だといわねばなりません。だから、せちからいヨーロッパでは火薬は威力ある武器に姿をかえてゆきました。科学の発達も産業革命の成功も亦せちからさからきております。そして、百年、二百年にわたるアジア支配となったのであります。

中学生のころ、海軍記念日の時局講演をきいたあとで、私は、征服しているヨーロッパ人より、征服されているアジアの人々の方がひょっとしたらほんとうの幸せなのかもしれないと生意気なことをいったのをおぼえております。

日本の戦国武士の中にだって、世をいとう熊谷直実やその子孫のような人がいました。直実は仏門に入りましたが、その子孫は信州の山にこもって、ながく支配とか被支配とかを考えず、無理をしないで静かな平和のみを念願する生活をつづけていたと最近読みましたが、やはりそうした人はいるものです。

自然科学のひとすじのみちは遂に原子力までできてしまいました。平和利用とことさらにいわねばならぬほどしのぎをけずる武器合戦です。

東洋人と西洋人は自然にむかっても考え方が全くちがっています。順応するという東洋的考え方

と征服するという西洋人の考え方のちがいです。

誰でしたか西洋文明は靴のようだと申しました。靴は外の土をうちにもちこむ、ころんでもただおきないというがめつさです。東洋文明はうちのたたみをぞうりとして外にもちだすようなもので、こんなつまらん私でもお役に立てばときわめて自然な低姿勢のなかによろこびをみつけているのです。

まだ見ぬヴェルサイユ宮殿はどんなに美しいかは存じませんが、おそらく日光東照宮の程度の超デラックス結構じゃないかと思うのです。宇治の鳳凰堂はどあたりの風景にまでとけこんではいますまい。それは丁度西洋画が額縁によって、その周囲と切りはなして鑑賞されるのに対して、お床の軸物がお床にあるからある美しさ。座敷や御庭と一つにとけ合ってかもし出す美しさと、全くちがっているようなものではないでしょうか。

東洋の心と西洋の心にさらに入ってみますなら、こんどの核実験を怒る心はあたりまえとしても、はけどころのない怒をどう始末するか、ヤケになってやろうという人もいるでしょう。しかし、ヤケを起して、刹那主義に走ったとて淋しさはかえってつのるばかり。

直接、間接に死の不安をもし芯から感じたとすれば、こんどのことも逆の恩寵となるかもしれません。

日本人はよく「死ぬ気で」と申します。武道のはじまりは切腹の作法からだともきいております。死ぬことがはんとうにわかったとき、ほんとうに生きるとはどういうことかがわかったときです。死ぬ覚悟でことにあたってこそ人の力のかぎりつくせるのではないでしょうか。自覚されないエネルギーがどのくらい、強いものかがわかるときです。

無手勝流というものもこの間のことをいうのかもしれません。

それはどこから生まれるかと申せばわれわれの中から以外ではありません。

川柳もそうしたわれわれの中から生れ、われわれの中に育っているものです。

仏に仕えるものは仏の中から、川柳するものは川柳の中から、この心がくみ出せるのです。

胃を洗い、脳を洗う心地で川柳に体当りしてみたいと思います。

これがこのけわしい世相のまっただなかに迎える文化の日のささやかな思いです。

（三六・十一・三）

川柳雑誌四一四号（十一月号）の中からもそんな句は拾えました。「ペンの散歩」で一三夫さんは「こうなったらかなわぬまでも川柳でこの怒りをブッつけてやりたい。」といってられましたが、同じ一三夫さんの

全市停電むかしはこんな星月夜

の句は自然への反省をさしてくれるよい機会です。

手のひらに夢をにぎって生れて来　藤原君子

その夢を無残につぶしてはなりません。子をおもい孫を思うとたまらなくなります。

核実験より株価が気にかかり　小西雄々

漫才や落語で核の外におり　谷口鉈愚坊

とまぎらせてはみても

せわしない光る鳴る降る又光る　隠岐不酔

何も雷だけではありません、不安な世相。

踏切の汽笛ダンプが組敷かれ　長野井蛙

古い機関車の方が強いぞ、ザマァ見やがれです。

背チャック一太刀浴びた疵に見え　那谷光郎

ドキッとさせられました。そう見えるのではなく血がふき出しそうです。

鎌研いで明日の日和をうたがわず　吉原紅月

やはり、願うのは平和の日のみ。

人類の絶えた地球に月が照る　西川晃

映画のトリック・シーンだけであってはしいものです。

そして

風よ吹け風に負けない火を灯す　林夢虹

前書に「カトリックの洗礼をうける」とありますが、火にも、水にも、こわれない心をきたえあげるチャンスなのかもしれません。

（三六・十一・七）

詠近舟同

須坂市　高峰柳児

レジャーブーム息子ますますぐれてくる

ただにらみ効かせる位置の社長室

今治市　長野文庫

十八九手帳一ぱい歌謡曲

和歌山市　秋月宏方

旅に来てまでもパチンコ屋をのぞき

新居浜市　月原宵明

僕の家まだガレージの用はなし

血を売った金でめし屋の大を取り

法務局まだ墨汁とつげの判

勝負師として夏からの足袋をはき

蜘蛛の死は洋傘畳む如くなり

肝疾患・疲労・二日酔
★総合強肝剤
ウロコ印
リポコール
（12種の成分を配合）
20錠・50錠・100錠
欧田薬品

軍隊でストをした男

・東野大八・

十二月といえばストライキの季節だが、今年は倍増ムードなどと余計なカケ声を総理大臣が出すもんだから、物価だけがやけに先行して給料がまだ停留所に残っている。雲カスミと馳け去る高度経済成長号を見送って、起て万国の労働者とがなりたくもなる。

「日本の賃金は最低じゃよ、もう少し上げてもらわんとこちらがモタン」

と箱根の日米合同委でゴールドバーグ米労働長官が口をすべらかすもんだから、総理もアタマへくるというものである。

―教養があり卑怯たり重役さという大井正夫の句があるが、賃金問題という奴は、経営者が会社経営をガラス張りにして「こんな具合だから、これだけしか払えないんだ!」というハラの底をみせる度量下足に由来する。陰にこもった隠し財産を作り、途方もない機密費をバラまき、幹部社員が社用族で浪費の限りをつくす。こんな会社にかぎってアカハタが林立する。

今年は、殊のほか景気がよすぎた。その反動から物価が急ピッチで上ったと思うと、株が一落千丈の大暴落、おかげでへそくり奥様が自殺した例が出てきたが、これと逆に東京では夜の蝶が千二百万円も客をだまして全国指名手配。美人にしては頭がよすぎる、と思ったら武州鉄道では亭主の元運輸大臣とアベック拘置所入りの奥さんがいた。久留米小町と異名をとったベッピンさんだが、こうなると「妻をめとらば才長けて、みめ美わしく」も生命とりと覚悟しなければならなくなった。

そうかと思ってせめて酒でも、と思うとホワイト・ホースは朝鮮人の作った密造酒で、その高級スコッチで三年間も一億円の荒かせぎしてたんだそうだ。

「するとマイクロマイクロキュリーも密造酒だったのか」

と大まじめでいう酔っぱらいがいた。こういう奴の頭の上へは六十万カウントの春雨でおしめりをくれなければ今年の調子はでてこまい。

つい調子にのってマクラが長くなったが、ぼくはこれまでストの主謀者になったことがただの一回ある。それは軍隊だ。

中支のある部落に一個中隊で約半歳駐屯したが、古年兵が退屈まぎれにさかんに補充兵をいじめる。なんの娯楽施設もないところなので、彼等は自分より目下の連中を痛めつけることによってウサを晴らしていたというわけだ。勅語に「上官の命をうけたまわること、ちんが直ちに命をうけたまわることと心得よ」とあり、これは階級制への裏づけであった。さらに「新任のものは旧任のものに服従、いささかも抵抗の所為あるべからず」となっている。厄介なのは後の方で、一等兵が後から入った上等兵をぶんなぐる例などは朝めし前だった。

補充兵というのは当時四十五才までのもので、メクラかツンボかオシでない限り、国民総動員法でネコもしゃくしも一兵卒に仕上げて軍隊へほうり込んできた。

親子、兄弟などは戦地でも珍らしいことではないが、なかには社長が二等兵で、小使いさんが曹長というのが隣りの中隊にいた。小使の曹長にすれば、社会人なら雲かすみの中にいる社長だが、ところは兵舎、そんなわけにいかないので自分の当番兵にした。こうしておくと他の一般兵より身体が楽だからだ。二人っきりになると立場は反対だが、眼の多い班内のこと、万事そういう風に運べるはずもなく、除隊すれば元通りだから曹長殿大弱りでいたことを思い出す。

とにかくそんな有様なので、頭のはげたいいオッサンが息子のような現役兵に朝から晩まで奴れいのようにこきつかわれ、こづくなぐるの連続で、みられたものではなかった。

ある日、ぼくが衛兵勤務についたばかりのとき、一人の老兵がどぶねずみのような格好で衛兵所へ逃げ込んできた。歩哨係の上等兵でいたぼくなので、

「一体どうした」

といいながらみると「助役」のニックネームの平常から真面目で通る気のいい男。

「殺される、殺されるから助けて下さい」

と真青な顔でガタガタ歯の根も合わずふるえている。

わけをきこうとすると、Kという平常から隊一番のごろつきで通るトビ職出の一等兵が血相かえてとびこんできた。

「此奴、ここへ舞い込みやがったんだナ」

とエンピをのばして助役のエリ首をひどい力でしめ上げた。

傍若無人なその振舞いに加え、衛兵を無視したシャツ一枚の姿にこちらも立場上、この野郎とアタマへきてガン、と一発、鉄砲の台尻でその背中を力一ぱいなぐりつけてやった。奴さんウーン、とうなってひっくり返えり白い眼を宙に向けてのびてしまった。

騒ぎはここからで、衛兵司令の

伍長が中隊長室へ呼ばれ、つづけてぼくも訊問だ。

中隊長は派遣軍第一の古参大尉で少佐になりたくてうずうずしている。この職業軍人の介添役でいる週番司官は、これまた十八歳の志願兵上りの古参準尉だ。

「要するに死にでもしたらどうする、きさまらは死んだとしてもどいつもこいつもハガキ一枚だがネ」

と中隊長

「衛兵が兵器をもって戦友を傷けるとは軍法会議ものだ」

と週番肩章をひねくって準尉がにくにくしげにほざいた。

ハイ、と引退ればいいのだが、こちらも血の気は多いし、平常の生活の無聊さもあってカッとなりやすい。おまけに二人のいい草が第一気にくわない。そこで、古兵は新兵をいじめすぎる、もう少し人間的に扱うよう取り締ってほしい。目下戦時中で、いざ事あれば死ぬときはみんないっしょでしょう、といってやったら、中隊長は眼をむいてぼくをにらみつけたままだったが、準尉がイキナリパンパンとぼくの顔に往復ビンタをくれた。そしてこの野郎！ とコーフンして後の言葉がつづかない。

まあ待て、と中隊長が制してぼくに約一時間学課をした。一礼して表へ出たらなぐられた両の頬べたがカッカッとはてる。畜生奴、といって衛兵所にかえって、司令の伍長に一切を報告。

「おれは兵隊を辞める」とぼくは装具を早速解きにかかった。

その様子をじっとみながら考えていた伍長は、やがて

「ストをやろう、しかしまだ早い、夜中の午前一時から開始だ、午前九時で解除といこう」

ときっぱり言った。

夜中の一時、衛兵司令以下十一人の衛兵は、しゅくしゅくと兵舎に引きあげ、そしらぬ顔で寝ることにした。さすがにぼくはまんじりとも出来なかったが、夜明け前に週番司官にたたき起された。

「この野郎、ふざけやがって」

と息をはずませていたが、こんどはさすがになぐらなかった。どぎもを抜かれたものとみえる。

この事件で、新兵いじめはピタリと止んだ。移動命令もきていたことだったが、とにかく軍隊でストをやった男、というのでぼくや伍長は一躍中隊の「顔役」的存在になった。これが平時で、衛戍司令部でもあったらわれわれはただではすまなかったろう。

こちらは第一線部隊のうえへき地でもあり、進級狂の隊長がわざわざこうした恥を上層部には決していわないだろう、そうぼくも衛兵司令の伍長もヨミをきかせたわけである。

ハラのすわった伍長は、東京の雑誌記者で詩人「再び黄河を渡る」という詩を中央誌に載せたこともある。新郷で別れたが、本庄とだけで下の名は忘れた。

中隊長も準尉も戦死したが、生き残った兵隊の一人は「隊長は退却中尉だ」とわらっていた。退却中尉とは部下の後ろ弾をくらったことを意味している。

續 川柳書架 (15)

川柳 江戸花街風俗

（阿達義雄著）

★本書巻頭の凡例の一節を抜くと本書の第一部は三浦屋高尾関係の句約七百を物語風に並べて、事件の展開させながら川柳語、特に花街関係のそれを解説し、一方江戸庶民が高尾に関する俗説を中心にして、封建制度下の権力者たる大名を如何に観察し、冷笑し揶揄し、又之に対し如何なる反撥を示したかという事を見てゆこうとしたものである。（中略）第二部は江戸後期に於いて、太夫に取って代った、呼び出し昼三の代表とも見るべき、扇屋花扇の関係の句を取扱った。（中略）第三部は拙著「川柳江戸貨幣文化」の延長と見るべきものであって江戸時代の通貨が如何な態様で花街に働いて居たかを川柳・狂句を通して観察しようとしたものであり、通貨の使用価値を遊女の格式との結び付きに於いて把握したものであって著者が最も力を注いだ処である。（以下略）

★目次の概略を挙げると、第一—川柳三浦屋高尾物語。第二—扇屋と花扇。第三—格式と揚代。（目次類目は省略させてもらった！—編者）附録—古川柳試験問題。（一）高等教員国語科検定試験問題（文部省案行）（二）松竹演出撮影所助監督試験問題

★昭和廿四年十一月五日発行。B列六号版二六四頁。定価一六〇円地方定価一七〇円。発行所、東京都千代田区神田淡路町二ノ一三、東洋館★著者は古川柳家として有名である。新潟学芸大教授。

柳珍堂・ひさご句集

（木村半文銭編）

★本書は川柳叢書第十一篇として柳珍堂及びひさごの句集を合冊刊行されたもの。そして柳珍堂句集の巻頭に松村柳珍堂略歴、ひさご句集の巻頭に木谷ひさご略歴が掲載されている。

★昭和九年三月一日発行。菊半截一一七頁。頒価送費共廿四銭。発行所、京都市北白川伊織町、川柳叢書刊行会。発行人村岸清堂。

★本句集は明治末葉以後、川柳の質的向上の先駆者として柳界に重きをなした松村柳珍堂と同じく、明治末葉に、六畳坊、七畳坊（日車）等と市岡中学出の三羽烏と謳われた特異な作家木谷ひさごの句集だけに先進の句を翫味研究されたい人たちにとって一読の価値充分の書。

みなさまの
たのしい
お買物センター
東京店
神戸店
有楽町
三の宮
心斎橋
大阪店
そごう

歐洲とびある記（完）

中島生々庵

アテネから カイロへ

え山下清

七月五日朝十時、ホテル出発。欧洲での最後のホテルと思えば妙に心惹かれる。さらばローマよ。

十二時空港をたってアテネに着く。二時間近い休憩は、空港の売店で土産物漁り、愈々カイロに着いたのは夕闇迫る八時頃である。

アフリカ大陸の一角と思うと、国際事情に疎い私にも、何となく空港そのものが引きしまるようだ。ドルの所持額を申告させる、出港の際には、使った金の差額を見せて報告する義務を申渡す。そうした手続きが、パスポートや検疫査証の外に相当に厳重である。その繁雑な事務を窮屈な制服でやる係官へ、これは又何としたことか、大きな蠅がひっきりなしにつきまとう。左手で蠅を追い追い、右手で書類を処理する係官殿、案外馴れた不感症顔。第一印象が蠅からはじまるこのカイロとはどんなところだろう。

ホテルに着く。室割りの前に食堂だ。食堂のボーイが、鼻下に黒い美髭を豊かに見せて、特異なガウン、トルコ帽といういでたちにはいささか度胆を抜かれる。背の高い、まっ黒い太い手で料理を運んで呉れる。異国情緒将に極わまれりの感がして、空腹の筈だのに食道通過が稍困難である。

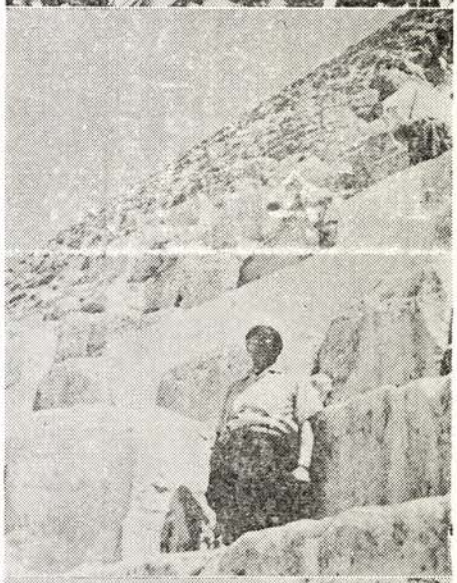
ホテル附近は、さすがに大陸第一の都会の中心だけあって、賑やかな商店街や、大きなビルも見える。暑いことには充分覚悟もして来たし、旅ずれで訓練されて来たつもりでも、さすがに暑い。一風呂浴びて、裸のまま室の電灯も消して窓に腰をかけていると、冷たい夜風が訪れて来て湿度の高い大阪より凌ぎ易そうである。ふと窓から下を見ると、このホテルが経営してるらしい夜間レストランに、いろいろ余興の催しものをやっているのが手に取るように見える。幸い私の室は三階で街に面しているので絶好の見物席である。他の室の人達も呼んで来て、とんだ納涼風景である。音楽に合わせて手品や奇術、ヌード嬢が立ちかわり入れかわり、中に日本ムスメが法被姿の日傘で何やら踊ってるのも見える。正式に入場すれば相当にボラレるだろうに、特等席からロハ見席、夜半二時過ぎやっと終った。おかげで裸の躰は冷たなって、ベッドに横たわると、首筋が引きつったように痛む。

翌六日は七時起床。眠むたい目をコスリコスリ近くの店に買物に出かける。先輩から云い聞かされていたので思い切り値切って見ると、先方は又気持の悪い程にまける。これも寂しいお国柄だと思った。

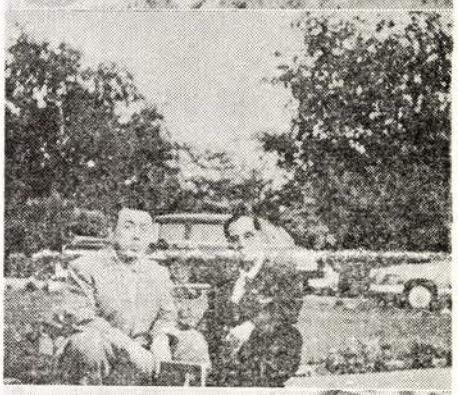
九時半から見物に出かける。先ず、予想外に近代化した街の建築が目につく。そして美しい並木道や、広場から幾十百とも知れぬ寺の塔が高く聳えて見える。一言にして云えば、世界最古の歴史を持ちながら、活気の満ち溢れた青年の街である。通りすがりに見る看

歐洲旅行の記念写真

武場隆三郎博士と筆者（フローレンスで）



ピラミッドと筆者（カイロで）



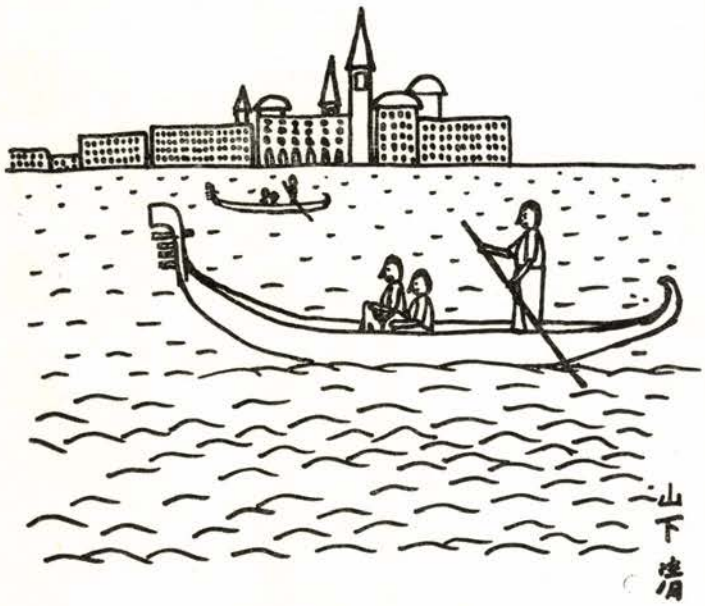
山下清画伯と筆者（コペンハーゲンで）

伊丹空港へ帰日第一歩の筆者（中央）と河村耀川医博（左端）

板やネオンの文字が、柳の枝みたいに、か弱くそして右書きにされているのが、東洋的な親しみを感じる。街路には跣足で、長い木綿のガウン見たいなのを着て歩く男性、チャトールという黒衣の婦人、子供達の半裸体、こうしたものが溢れている。然しじっと、これらの人達を見つめていると、その顔だちが如何にもノーブルで、如何にも古美術的で、如何にも超現代的で、今まで歩いて来た欧洲各地で感じられなかった、複雑な何ものかが、私の目につく。私はこの感じ得た印象を、どんな工合に記録すべく表現したらいいのだろう。実はその悩みだけを小日記帳の隅に書いたまま帰って来たのである。この気掛りを見事に解明して呉れたのは田中澄江さんが新聞紙上でズバリ書いた随筆である。「カイロの町を歩いているとじつにいろいろの顔に会う。ジュリアス・シーザーもかくやと思われるようなのや、アテネの神殿のあとから、おりたってきたような娘。クレオパトラやナポレオンのおもかげもあり、博物館の石像が生きて動いているのかと思うような顔だちにも出合う。これは何千年の昔から、ナイルの三角地帯に興亡し、あるいはこの地に進攻して来た各種民族の名残りをとどめているのである」。私はこの田中さんの名文を私の旅行記の中に収録さして頂くのを光栄と思う。

エジプト博物館に着く。三千年も五千年もたった歴史が、当時の豪勢さそのまま展覧されてある。九百ポンドの純金で作った王様の棺、一人の王様について四つの棺を作り、頭、胴、四肢等をそれぞれの霊を象徴して収めるそうだ。一つが九百ポンド、四つで三千六百ポンド。グラムで云えば百六十三万グラム。この純金を日本円に換算したら、どの位になるかいなと馬鹿な計算をしている仁もある。全棺に附属したもろもろの祭具も、エジプト古美術の最高峰であろうものが、所せましと陳列してある。

サルタンハッサン寺院は、エジプト回教徒の大本山である。高いドームに囲まれて、毎週金曜日には大説教が現在でも開かれる由で、十四世紀の建築と云う。



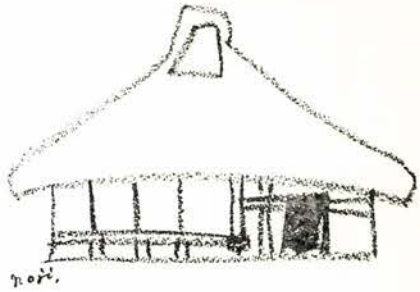
ベニスのゴンドラ

ナイル河を渡ると、左に動物園右に植物園がある。近くにカイロ大学があり、回教の外に工学部農学部の講座があって、二〇%の女子学生も在学し、この一帯を大学地区と称せられる。

これからバスはピラミッド通りに入る。文字通り一直線に五哩もあり、両側には近代建築と古い家が入り混って立って居る。やがてギゼーのピラミッドに着く。ホテル・メナハウスは、ピラミッドをすぐ庭先に眺められる様な位置にある。暫く休憩してホテル前からラクダに乗る。生れて初めて乗るラクダは乗り降りが大変で、だれもかれも奇声をあげながらの騒ぎようである。それにもまして、口やかましくチップをねだる雲助には、そのガメツさ、ほとほと手におえず。持ち合わせの小ゼニ、煙草等を底をたたいて見せても承知せぬ。難業苦業の三十分間であった。

世界最大の建造物と云われるピラミッド。先刻見学した王様の金棺と共に、その威勢を誇示した鼻息のするどさには、大阪城の石垣等は吹きとばされそうである。その大建造物を紀元前二千六百年に作ったと聞いては驚き入る外はない。一番手前のが最古最大で高さ百四十五米、四十年の歳月を費やした由。三トン位の石が二百五十万個積み上げられていると、雲助がチップほしげに怪しい英語で説明する。百九十米の斜辺をよじ登る元気はないが、せめてもの思い出に、内部に設けられた階段を、中腰にかがみ乍ら登って見る。こうもりでも出て来るのではないかと案じていたら、これは、これは観光客のために丈夫な鉄の階段が作ってあるし、天井には螢光灯が照らされている。一寸した驚きである。頂上から四分の三位のところが、例の金の王棺を安置された室に達する。どこからともなく五千年前の空気の一部がにおって来るような気もする。そして現在私が呼吸しているこの空気とは違った組織のものだったような錯覚が起って来た。とにかく余り長居を楽しむ場所ではない。お隣りのスフィンクスは高さ二十米。男性の人面と四肢は獅子、自然石に彫られ、ピラミッドを守護する役だと云う。当時の獅子崇拝がこうさしたものらしい。記念撮影してラクダと別れ、バスに乗り、レストランで中食、おいしい西瓜を食べてホテルに帰る。

そろそろ日本が近づいて、再びめぐり来た時差に頭を調整しながら空港に着いたのが、五時前。入港の際から気になっていた通関の



窓口談義

―引用句は照合を―

麻生路郎

三十年も、もっと以前のことである。阪神に住んでいた大学教授のRは私は招いて、お互いに好きな酒をくみ交わした。

だいぶ酒がまわって来た。話はすべて川柳のことだった。Rの川柳熱もそろそろ高潮に達していたころのことだ。

Rは何か書いて呉れと、半折を持ち出し、妻君に墨を摺らした。

「何が、いいかな」

と私は筆を持ったまま、彼の顔を見た。Rは言下に、

金借りに行けば有馬の夏と聞くを頼むと云った。その頃の有馬はブル階級唯一の避暑地だった。今から思えば実に質素な時代だった。そこで、私は酒の勢いで彼のいうままに筆を揮った。それがその後表装されたことは云うまでもない。

ところが、この句は〃金借りに行けば有馬の夏と聞く〃でなく、原句は〃借りる気で行けば有馬の夏と聞く〃であったのを、うっかりRの云うままに書いてしまったのである。えらいミスをして申し訳がないが、その時はそれに少しも気がつかなかった。しかし、私にとってはミスでは済まされない。他人によって拙い表現に改作された句が、いつまでも残るということである。これは原作者のしのび得ることではない。そんな場合、Rの悪意の改作でないことは云うまでもないが、ウッカリ彼自身式に表現してしまった不用意さの責めはまぬがれないだろう。

私は機会があったら、もう一度あの句を揮毫して、あの軸と交換してもらい、間違った軸を廃棄したいと思っていたが、その機会が来ぬうちにR医博夫妻は戦禍のため塹壕内で亡くなられた。あの軸も同時に焼失したかも知れない。思うても寒い話である。

R博士も、M君もよく、私の句を、

俺に似よ俺に似るなと子を思ひて

と、あちこちに引用して呉れたものだ。こんな具合に不用意に改作されては褒めてくれていても、おかど違いで苦笑しないではいられない。他人の句を引用する場合には必ず、原句を照合して見るだけ

〃俺に似よ俺に似るなと子を育。〃

気配も、ガイド氏の機転で、子ぬけする程無事パス、待合室に入る。一難去れば又一難、予期しない出来事が待ち構えていたのである。それは予定乗機のKLがローマで故障、五六時間の延着と云う。機内で予定された夜の食事をこの蒸し風呂のような待合ですます位は、まだ辛抱するとして、さて次のバンコックからの乗り換え機があるかどうか。なかったらどうするか、バンコックに一泊するとしても翌日からスケジュウルは大変更を余儀なくされて香港のホテルの事まで心配になって来る。旅行社と飛行会社も懸命にやっているが要領を得ぬまま、疲れ切った躰を卓に寄せて仮眠をとる。その間六時間、夜半十二時過ぎ離陸、四時十五分バンコックに着陸。あらゆる手段が八方尽され、最後には機内から強引に頼みの無電が奏功し香港行のTG機を三十分間出発延ばして貰い、飛び乗るようにして危くセーフ。東海道膝栗毛時代に渡し舟を積み残された惨めさより、もっとひどい目に遭うところだった。棄てる神あれば拾う神もある。TG機に乗って飛び出すや否や、御馳走ぜめのサービス満点。マンゴスチンの美果を味わして呉れたのも、忘れられぬ思い出である。かくて十時半、芽出度くも無事香港にこそ着きにけりである。

もう三日すれば日本の空になり
ピラミット入れた写真はそり返えり
人目には悠然としたラクダ乗り
チップほしいとこでラクダは立ちどまり
スフインクス背にしてラクダの乗りごこち
ピラミット五千年の歴史肌にふれ
五千年前の空気もちと残りこうもりが出そうな道の蛍光灯
ピラミット大阪城がはずかしい
沈黙と云う名をスフインクスの顔に見る
筋骨逞しカイロの蠅は群をなし
お役人の威厳をからかう蠅の群れ
トルコ帽とガウンで給仕手の黒さ
半額に値切られても　サンキウペリマッチ
冷たさはナイルの河の夜の風

の用意をしないと、エチケットに外ずれるだけでなく、論理が徹底しないことになる。

私の「俺に似よ俺に似るなと子を思ひ」の句はよく、引用されるが、近ごろでは新仮名遣いで「思ひ」を「思い」と書くことにしているが、揮毫の場合には「思ひ」や「おもひ」と書くこともある。最近、「親に似よ親に似るなと子を思い」と引用された柳人があったが、ここまで来ると滑稽だ。

うちの雑誌への寄稿であるなら訂正も出来るし、ワハハハでも済むが、他誌の場合、編集者が原句を知らずに、そのまま載せたとなると、寄稿者だけの恥では済まないことになる。他人の句を引用する場合は面倒でも、一応原句の所在を調べて見るべきだ。でなければ、筆者の論旨が宙に浮いてしまう。

拙吟

人類は悲しからずや左派と右派

という句を、某誌に

人生は悲しからずや左派と右派

と載せていたが、これではねえと云いたくなる。「人生は」と「人類は」の違いをよく嚙みしめて見て欲しい。「左派と右派」と「右派と左派」にされても困る。ソンナ大ざっぱなアタマで詩をいじられてはたまったものではない。

老人にはよく、思い違い、記憶違いで物を書いている場合が多いし、若い人にはこの詩語はワシの創作だなどと豪語している場合があるが、たったその一語で若いなァと鼻であしらわれていることをご存じないのもいる。

どんな仕事でも、底は非常に深いものである。研究というものはこれでいいということはないものだ。研究は死ぬまで続けても、それで終ったわけではない。その人のした研究のその続きを、他の人がまた研究をするので、限りなく発展していくのである。

生前八十回はど宿替した食満南北が亡くなった時に、四天王寺の本坊で告別式があった。

その時、私は南北の霊前に向いて、弔句を二句詠んだ。その一句は、

宿替もこんどは墨地ないところ

だった。告別式に列席した多くの人たちは何れも、南北に親しかっただけに、この句に接して思わず声をあげて笑った。暫らくは南北の告別式らしい朗らかさな空気が漂った。私の句は勿論、南北の死を茶化したわけでなく、彼のために借金とりの来ない浄土の安穏を祈ったのであった。ところが、この句が他誌に無断で掲載されたが、誤記されていた。勿論、悪意で誤記されたわけでないことは判るが、作者の私にとっては遺憾であった。あとで聞いたら、柳人でない人が、短冊から写したとのことであったが、編集者の不用意はまぬがれない。その後、南北の句碑建設の時にも、同士を募る一文の中にも引用されたが、これ又誤記されていた。その誤記は他誌に誤記された句とも違っていた。僅々十七音字に身を削ずる思いで一字もゆるがせにしない短詩人の心はそうした、心ない人々によってたやすく踏みにじられてしまったのである。

敢て、私の句が名句だと主張しているのではない。私の句にしても、誰の句にしても、その人、その人の血の流れた句を、心ない人々によって、粗末に扱われることを心慨に思うものである。

私は、不安な文字は辞書をひくこと、引用句は原句と一応照合することを、私自身実行していると同時に、人にも実行して欲しいのである。

前述した私の揮毫の失敗は幾年経っても忘れられない失敗であるそれ以来、私の句を突差に言われても揮毫しないことにしている。

日本ムスメ寂し　カイロの夜のショウ

又聞こえる　カイロは静かな鐘の街

遅しとは　カイロの美男の目鼻だち

死んでからまで黄金に包ませる

香港

七月七日。七夕の夜香港に着いた。

長い旅が、もう一日を残すだけになった。ミラマールホテルはこの旅行中初めての冷房設備がある。室も立派だが日本語も大分通じるし、ロビーには日本人の顔が沢山見える。何としても心強いわけである。日本のホテルでも余り見受けない浴衣がけの婦人が食堂に出入りしている。これが香港風景とでも云うのか。

翌八日は出発の夕方まで自由時間とあって、思い思いに見物やら買いものやら。私は渡辺氏の知人で、日本語が私よりうまい蔡さんに連れられて専門店を歩き廻り、品撰びやら、値切り方やら指導して頂く。香港は見物に三日、買物に三日と云われているそうであるが見物は又の機会にして、商店街を歩く。店舗の整うていることは銀座や心斎橋筋の専門店の感じである。ただやたらに値切るとまけるのが気になる。カイロ程にはなくとも何となくお国柄である。英領となるまでは、寂しい漁村で海賊船の出没やら、阿片の密貿易やらと今う過去の歴史が、どこかにただようているのかも知れぬ。

旅行社が一行のために御馳走して呉れると云うので、中華料理の昼食。さすがに本場とあって味と云いし、雰囲気と云いし、珍品と云いし初めての経験であった。而もこの旅行の最後の会食であると云うので極めて印象的であった。

ホテルで少憩して空港に向い、延着のAF機を待って七時飛び立つ。一路。はんとうにまっしぐら。日本へ、東京へ、大阪へ。

香港で日本語のお疲れさんを聞く

日本名刺　香港に来て役に立ち

やれやれの香港冷房がききすぎる

香港で有りがねみんなおきなはれ

羽田着ベルトをしめて目をつむり

伊丹空港孫だきあげたまま絶句

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

商品となって面接試験すむ　福岡市　田口　麦彦
月収を忘れる西部劇が好き　同
旅便りここは美人の多いとこ　同
ゆきずりの恋にも似たり紙コップ　同
アンテナのひしめく路地へ帰りつき　同
平和たのし伏字などない本で満ち　同
片方の鼻で暮した風邪十日　京都市　都倉　求女
置時計秋の速さで刻む音　同
妻の風呂秋の夜長を楽しめり　同
行水の母子の背が夕焼る　同
立話ついに家まで連れてくる　同
寝るもよし散歩又よし秋晴の　貝塚市　杉本　一鶴
高給のナース産月までねばり　同
絶安をしてても三十代の血はさわぐ　同
月の裏みたいな肌へ塗りたくり　同
ある時は菩薩ある日は夜叉の妻　大阪市　木村　草々
野心色褪せぬ三人目が生まれ　同
銀髪尊し巡査も言葉改まり　同
死の灰の恐さ地球とはせまし　同
あんま師がさわれば痛いとこばかり　愛知市　須藤　俊江
夫婦して出歩く隣へ気をつかい　同
踏切の地蔵にまんじゅしゃげ赤く　同
鼠捕り子鼠ばかりかかるなり　同
菜葉服背広を着れば肩がこり　玉野市　小谷　仙山
景色より宿が美人で旅をほめ　同
小包の栗が覗いたまま届き　同
食欲の無い秋空が澄み渡り　同
敗されてから法律を読みあさり　市川市　坂東　若芽
肥るのは嫌いおさつは遠慮せず　同
流された土手に一輪まんじゅしゃげ　同
他人から情を受けて淋しがり　西宮市　樋口　寿栄
親切を素直にとれぬ金を貯め　同
外遊をしてから砂糖のないコーヒ　同
神詣それから香具師にだまされる　羽曳野市　島田　雄峯
高遠な理想ちぴりちぴり貯め　同

呼び出し電話

直原七面山

ある月曜日の午後三時頃のこと〝直原さん柳原（三里程離れた硫化銅の産地）からお電話ですよ〟と、お隣りの呉服屋の店員さんが呼びに来て下さったので、妻はおばあさんの仲人の話かなと思いながらお隣りへ急いだところが、送受器を持つが早いか相手はさも待ち兼ねていたように、

〝実は一昨日お目に掛った山中ですが〟

と、早口におっしゃる。妻の記憶に山中という人が全然なかったので、

〝山中さんとおっしゃいますと〟

と尋ねると、

〝あっ奥さんですね、実は一昨日津山で御主人にお目に掛りまして〟

とのこと、一昨日といえば土曜日で主人は朝早く岡山から岡山発の列車で奈良方面へ役所の人達と一緒に旅行に行った筈なのに津山とは変だなあーと思いながら、

〝ハァー〟

と気の無い返事をすると、

〝御主人はおいでですか〟

とのこと。

お交りが有りすぎましたためぐり逢い　同

さからってほしいところで妻は折れ　松山市　沖原　光雄

父ちゃんのよいようにと妻も老け　同

只あがくだけの生活に灯がともり　同

理性強く自己を装う日の寂し　西宮市　末沢　花美

白菊におののく心背信の　同

音楽会だ画廊だと秋の日は短し　同

老いらくの愚痴も恪気も種が切れ　浜崎市　高橋　蟠蛇

暮の市人の買ぶりみて戻り　同

愛情は別サービスは致します　同

いまに見ていようとは云っただけのこと　仙台市　平野　光道

罪悪とストをののしりまだ無職　同

交通事故夕刊に見て妻と酌む　同

バッターインザホール約手の日が迫り　青森県　木村　涼人

腕カバーぐらいに公僕肩が凝り　同

悔いてなお妻はトボトボつどて来る　同

間借する瞳に銀行の基礎工事　京都市　大久保　和三郎

一家団欒バタヤの昼を見て通り　同

子がなけりゃまで折れて来た三十娘　同

相槌を打ってくれぬのであわて　児島市　伊丹柳瓢子

義理あって痛い財布の底はたき　同

おみこしへはしゃぐ孫の肩車　同

カーテンで仕切る養老院の恋　兵庫県　河原みのる

泣いているどころか喪服の工面　同

移る世やテレビ無い訳たずねられ　同

縁談の親族会議異議がなし　大阪府　桐山　清風

縁談に母在わすればと娘が思い　同

縁談に社長も一と肌脱いでやり　同

添い遂げたといわれるミミな仲だろか　伊丹市　小川静観堂

朝食はパンとミルクの文化なり　同

ふところを訊ねられてるピクニック　高槻市　近藤　昭夫

おいそれと親も貸してはくれぬなり　同

妻の留守雀友手配手際よく　関山市　行吉　輝次

腕時計出してデイトの時間決め　同

こんぴら大祭　一句

おさがりの頃には酔が醒め始め　丸亀市　平沢ゆずる

又値上げ　一句

散髪の椅子に坐って吝になり　同

ペンだこの手に履歴書へ筆を持ち　大阪市　山田　蛙水

一夏の空瓶代の貯金玉　同

〃いいえ、主人は勤めに出ておりますが〃

〃なにお勤めに〃

と、どうも腑に落ちませんねといった感じの返事。

〃お勤めにですか〃

と念を押されるので、

〃ハイ、いつものように朝の二番で出掛けましたが〃

というと、

〃お勤めにねー〃

と合点がゆきませんねーといった声音。

〃で御用はなんでしょうか〃

とさきをせかせると、

〃実は○○のことですが、一昨日お目に掛った時じっとうと申し上げておいたのですが相手方に確めに行って見ますとそれが……〃

声がかすれていて○○の○が声も小さく聞きとれないので、

〃一寸お待ち下さい、どうもおっしゃっておられることがよく判らないんですが〃

〃判りませんか〃

〃ハイさっぱり〃

話が通じないのでこれはてっきり呼び出した相手がまだ電話口に出ていないのだなと思ったのらしく、

〃お宅の御近所に○○をかっている家があるでしょう〃

〃判りませんが〃

〃判らないって奥さんお宅のお隣りと聞いているんですが○○をかっているでしょう〃

いかにもじれったいなといった

すぐ逃げるかねず知りつつ紙幣を読み　鈴鹿市　吉田　俊和

生キャベツ好きビタミンの音で噛み　同　同

弁解はせいでもいいと母の顔　福岡市　青柳　武

催促のしづらい額に用が出来　同　同

ささやかな祈りにも似て赤いハネ　出雲市　中川　晃男

写生する少年の瞳も青く染み　同　同

苔寺にて　一句

かぐや姫かくれていそうな竹の藪　西宮市　鵜飼　鮎子

京都にて　一句

お向いも地図をひろげている市電　同　同

盃を下戸は恐ろしそうに受け　玉島市　井上　旭峯

玄関で盃受ける目出度い日　同　同

融通がきくとは飛角成ってから　愛媛県　川又　庸児

結婚をしたがらない娘のイヤリング　同　同

甲斐性者のらりくらりとして儲け　竹原市　杉原　愛鳩

夏やせが戻らず眼鏡ずりおちる　同　同

偵察の蟻のはい寄る昼寝莫蓙　大阪市　万代句念坊

地蔵盆素手でつかんださがり菓子　同　同

欲得をはなれりゃ虫もまた涼し　鳥取県　鈴木村諷子

ノッシノッシと象のごとく歩みたし　同　同

胃がんと知る見舞は花ばかり　西宮市　松島　光一

行水へしなびたところかくしとく　同　同

骨固くなったを知った舞扇　愛媛県　河本南牛史

祭礼の余熱と申す恋があり　同　同

嫁の荷に日歩三銭がつく悩み　兵庫県　斎藤たけお

眼を病んで読むこともせず淋しがり　同　同

効かす気の最後の釘で板が割れ　竹原市　山内　静水

結局はのらりくらりと裏切られ　同　同

ふとんまで乾したと無理に泊らされ　大阪市　藤冨　淀月

塩漬のつもり気になる相場欄　同　同

ふるさとを想えと届く柿の秋　金沢市　山本　木象

斜陽なら松の手入れも赤字めき　同　同

先祖伝来の田やいうとれぬ札の嵩　兵庫県　遠山　可住

友情の果終電にのりおくれ　同　同

背の子に流行唄を教えられ　布施市　坂上山椒坊

色褪せた形身の服をもてあまし　同　同

一たんは捨てた故郷へ退院し　貝塚市　護川　梢月

皺一つふえたと喜劇から戻り　同　同

スクーター通勤秋のサングラス　滋賀県　土守　蜻蛉

自慢にもならない過去の華やかさ　同　同

感じの声。

〃判りませんが〃

すると一寸間をおいて、

〃奥さんは直○さんですか〃

と尋ねるのだが直○の○がこれまた聞きとり難く、原ととれないこともないので、

〃ハイ、直原ですが〃

〃じゃあ○○が〃

〃どうもおっしゃいますことがチンプンカンプンで私には良くのみ込めませんが〃

〃判りませんか〃

〃判りませんがそのなんとかがじっとうとかいうのは一体どんな品物なんでしょうか〃

〃品物ですって、まあ品物といえば品物ですがブタですよ、ブ、タ判りますか奥さん〃

〃えっ！ブタですって〃

豚と聞いたとたん妻はびっくり仰天してしまったらしい。それもそうでしょう。

年に何回かブタの肉を買って食うことはあっても、いわば豚には無縁の暮し、おまけに弓削の町に豚の子一匹飼ってる家なんか一軒もないんですから。

〃ブタなんですね、訳が判りません〃

〃訳が判らないって奥さんお宅直○さんでしょう〃

〃ええ―、直原ですよ〃

〃おかしいなあー〃

〃もしもし、一体どちらへ電話をお掛けになったんですか〃

〃どちらへって、奥さんそちらは

見舞にも妻を遣る程気をつかい　芦屋市　里田一ン十
興奮をするから見舞待てと云う　同
新聞をことわる妻が芝居する　大阪市　西本　保夫
寄せ書は腹にない事云うて書き　同

記録的残暑　二句

セルで見る十五夜今年は裸で見　和泉市　末田　晃康
夏型の気圧配置で秋祭　同
子を叱りおかしくなった胃の具合　大阪市　川口　弘村
台風でやられたと思い寺の寄附　同
百姓が嫌で土方の渡り鳥　笠岡市　谷本鈍愚坊
行きもせぬ旅行プランを云いふらし　岡山県　岩道　博
招かれる客の一人になってゆき　松江市　岡崎　雪美
仏壇の灯もスィッチに電化され　石川県　南　伝一
ニューフェイス社内の空気派手になり　河内長野市　森本黒天子
幸運と云う平凡な日が続き　鳥取県　鳥取　周甫
母達者しばしも太陽を無駄にせず　津市　嶋野ひろし
芸術を尊ぶ世とはなり平和　宮崎市　野口卯之助
曲った背で孫は不平も云わず寝る　玉島市　田辺　好女
女房がもうけ始めて強くなり　大阪市　山田　迷朗
運動会小中高で母疲れ　今治市　越智　一水

我が道を歩く雑音気に止めず　兵庫県　常岡　孝風
めしにする酒は程よくまわって来　守口市　波多野　美由起
盆踊みんな苦のない顔ばかり　布施市　橋田　尚子
少々は痛いと外科は先ず威嚇し　神戸市　吉田　隆史
好きな酒飲んで長生き談を聞き　愛媛県　藤原　君子
相槌を打ってボスからにらまれる　竹原市　大洲大八洲
打開策聞かれたこちらも倦怠期　高知県　山川　勝子
爪の艶もう退院が待ち遠く　七尾市　松高　秀峰
貧者の一灯胸につけてる赤い羽根　大和郡山市　松本　峰水
名月を雲が隠して飲みなおし　香川県　三井　酔夢
精一ぱいの反抗顔だけ笑って居　八尾市　吉田　博一
商魂は風水害を直ぐ活字　茨木市　高木繁太郎
仲人は算盤弾きすすめに来　芦屋市　三上　芙路
供出の米に一升びん供え　羽咋市　三宅　ろ亭
只逢うて満ち足る歩み練る如く　守口市　樋口　一峯
噂だけでなかったらしく岩田帯　富田林市　浅川　八郎
株暴落自殺の記事をねまで読む　布施市　湯谷ごん太
賃上げのデモ繰りかえし繰りかえし　松江市　岡崎　祥月
ラブレターこの書きぶりは熟練者　姫路市　隠岐　太郎
万邦親和首相が書けば額になり　マカベル　上田　紅渓

十番でしょう〃
〃ハイ十番ですよ〃
〃変だなあー〃
〃もしもし、十番は十番に違いないんですがどこの十番へお掛けになったのでしょうか〃
〃どこの十番ってそちら亀の甲（弓削から余りはなれていない町）の十番でしょう〃
〃えっ！亀の甲の！　冗談じゃありませんよ、こちらは弓削の十番ですよ〃
〃なに弓削の十番、（驚き入った声で）じゃあお宅は直平さんじゃあないんですね〃
　この時初めてジキヒラのヒラがはっきり聞こえる。
〃そうですよ、ジキヒラでなくジキハラですよ〃
　とつんけんどんに答えると、山中さんとおっしゃるお方はいたみいった声で、
〃こりゃあどうも……どうもどうも……とんだ間違いで……どうも奥さん……〃
　妻が送受器をおいた瞬間、呼びに来て下さった店員さんはむろんのこと、その家の御主人を初め買物に来ていらっしゃるお客さんが全部打ち揃って可々大笑。
　病後の妻はこの訳の判らぬ電話の応答に疲れ切り、フラフラになりながらその笑いの渦の中を我が家へ帰って来たとのこと。
〃豚には全く弱りましたよ〃と夕餉の膳で述懐する妻の顔には隠し切れないおかしさがこみあげていた。

特集

ストあれこれ

「もういくつストがすんだらお正月？」
コドモたちが云うように、また歳末ストのシーズンがきました。
サテ川柳人はこれらのストを、どういう眼でとらえますかな。
—編集局

ストも程々に

市場沒食子

第二室戸台風後三、四日は秋来るを思わせたが残暑はぶり返して測候所を面喰わせた。

九月の声を聞くと日の短かくなったのがぱっきり目立つし、正月もまたたく間にやって来るような気がする。労組のストも今では年中行事の一つとして歳事記にはいりそうである。

事実もう、年末争闘の前哨戦は始められている。前哨戦が意の如き結果が得られねば、忽ちストへとスイッチは切替えられる。末端管理者である僕もストの余慶を受けるわけであるが、ストの余波の被害も惜しみなく受ける一人である。

郵便物の遅配もその一つだが、それよりも遠方へ通勤している関係上私鉄のストが私には困りものの第一である。朝は平常より早く家を出ねばならんし、市電、環状線、国電と利用してやっと京都駅へ行き、更に京都の市電に乗って病院からの指定の場所へゆかねば迎えの病院のバスに乗れない。若しそれの時間が遅れると後は自弁のタクシーの世話にならねばならない。といってストだから休んでしまう訳にもゆかないし、本当に弱ってしまう。

それからもう一つは小、中学校の先生のストであるが、いつか京都市内の去る警察の前では、中学校の先生達が後鉢巻でデモ行進後ワッショイ、ワッショイと威声を上げているのを見て寒気がしたし、鳥肌になった記憶すらある。義務教育でストまで子供に教えてもらわなくてもと言う気が今でもする。

ストの体勢は勇ましい、相手をイカクする如き鉢巻は全く映画の仇討か、博徒が竹槍を持って喧嘩にでもゆくような姿である。それはさて置き第三者へ与える被害も一寸考えてはしい、最もストは是を計算に入れての行為だろうが、迷惑を受ける方は実にやりきれない、ストも程々に願いたい。

顔見せとスト恒例の十二月道義地に墮ちて先生と私鉄スト

先生のデモ鳥肌を生じたり

老年組は踊らない

国弘半休

「スト」の記憶は終戦後のことでそう古いことではない。

某電力会社の労組や国鉄労組が自分達のベースアップを要求して、夕食時家の電灯を点滅したり終戦混乱のなかでさえ止まらなかった汽車を春斗だ、年末斗争だと言ってスケジュールを組み汽車を停めた。又最近では、郵便物を遅らすストを全逓労組の諸君がおやりになって居る。長期に亘るストでは炭労大手三社の流血ストで、これ等は明らかに二大思想の相克とみて間違いあるまい。

永年国鉄のお世話になった私が今更国鉄労組を語る義理あいでもないが国民に迷惑をかけるストのスケジュールは組むべきではないと思う。

ヒモ付きの駅手ピケ隊で稼ぎ

統一斗争を以ってストの効果を上げようとするには多数のピケ隊を必要とする。そこで労働者に動員がかかる。ところが老年組には当局側との古いつながりがあって、おいそれとは踊らない。そこで青年層に動員が下る。

この間の取引は軍隊程の規律はないが若干の圧力はかかる、日当三〇〇円から五〇〇円位が当時の相場だったように記憶する。

ストはいやはや赤旗鉢巻労働歌

原色の赤を組合旗にした事由がどこにあるかは別として、文化水準の低い国民の好む色であることは間違いはない。赤から受ける印象は危険信号、危険品位のもので、どう見ても平和的な感じは湧いて来ない。国旗の日の丸は赤で画くがあれは赤心と言って誠の心を表わしたものであると教わって居るが、赤も角が取れて丸くなると又受ける感じが違って来るのではなかろうか？。

労働歌前へ前へと調子とり鉢巻になって亡びた日本史赤旗の行くえじぐざぐデモとなり

両刃の剣

真鍋一瓢

近頃は一般に栄養がよくなり特に青年が栄養を取り過ぎるせいか、ボーナスの要求であれ賃上げであれストの一回もぶたずして妥結するとまことに味気なく思っているようである。彼等にとってはストも亦こよなき青春の刺激であるらしい。何しろ労働者が資本家に対して要求する事直ちに斗争と呼ばれるのである。曰く年末斗争曰く春斗秋斗と、金を貰うのに闘って奪ろうと云うのだから、さしずめ強盗根性といったようなものかも知れない。相手が相手ならという訳か資本家側にしてもどうかと思われる態度も見えなくはないが。年中行事の私鉄ストなんか

見ているとまるっきり日めくりでもめくって行くように、部分スト重点スト、二四時間ストと整然たるスケジュールをその儘実行している。

会社側も平然として、同業他社の動向ばかり窺っておつき合い気分を楽しんでいる。私鉄屋さんに限って自主性なんてものは殆んど持ち合していないらしい。でなかったら一社が歩みよって妥結したからと云って、台風で塀が倒れるように全部バタバタッと解決して行くのが合点がいかない。毎年やられるこの茶番劇も、もう此の辺で幕にして貰いたいものである。そしてこんな茶番劇は池田さん主演の経済成長のブレーキにするのなら話は又別であるが。

かつて水谷谷水氏が次のような句を発表されたのをふと思い出したが、

尻馬に乗らな資本家側にされ

威勢のよいストライキの波の中にもこんな連中が可成り居ることを面白く表現していると思う。この連中こそストライキを両刃の剣であると自覚しているのである。

ストの否を説くは雑兵共の部屋　一瓢

組合運動の足手纏になり邪魔者になるのが老兵即ち組合の雑兵でいささか始末が悪い存在であるらしいが、衆寡敵せず、谷水氏の句の通り尻馬に乗らされて、ぶつぶつこぼしながら、ええ気の済むようにさらせ。

同情どころか

小西雄々

十二月の声を聞くと、いわゆる年末斗争が展開されるが、これで一番迷惑を受けるのは一般庶民である。電車はとまり、郵便物は遅れ全くいいところがない。白鉢巻で威勢はいいが、年末手当の要求額も池田政府の所得倍増に歩調を合わせ大きい額となってきた。はたしてそれだけの賞与を獲得してもその後の企業が成り立つであろうかと判断に苦しむようなこともある。

ストをするときほど仕事に熱入れず　雄々

実際に、ストをするときのように一生懸命仕事をすれば、会社も儲かるから賞与も沢山出ると思うが、勤務時間の短縮を要求する位であるから、とてもそんな考えは無いようである。

鉢巻を締めれば給料上る職　幸子

これは賃上斗争を詠んだものだが、鉢巻を締めてストをすれば、必ずいくらかの給料が上る職業の人は全く結構なお身分と言えよう。ストをするにも出来ぬ農家や、中小企業などにはうらやましい限りである。

ご同情して下さいと電車と　雄々

私鉄では「ご通勤の皆様、△△電鉄のストにご支援をお願いします」と、連呼しながら、年末の忙しいときに初発から電車の運転を取止めている。これでは同情どころか、憤りを感ずる。

毎年、春季斗争から年末斗争まで、総評の計画どおりに、同じことを繰返しているが、ストをしなくても、円満な話合いが出来る態勢に、一歩進めてもらいたいものである。

結論として、私はストは嫌いである。まして他人のストに同情をしたり、支援するようなお人好しではない。

恒例の行事

石倉旅風

十月二十四日国道第一号線某所の新築ホヤホヤの工場に、大きな赤旗がズラリ二十六本並んで立って居た。ストとは歳末ボーナス目当ての恒例の行事と思って居たら、これはまた手まわしのよい、寧ろ余りに先制的な匂いの強いストだ。

然も其処からは却って何か一脈の寂しさと奇妙な、労使どちらに対するか判らない痛々しさを感じたのは何故だろうか。但し断わるまでもなく私一人の感覚では有ってもそれは此の際当然である。ストとは経済力による圧力を経営者にかけるものと思われるが、経営者も只手を拱いて見ている訳では無い。所謂、ストやぶり。これに対してまた同情ストや資金援助等を露骨に高価な経済戦が展開される。そこで

働いて取れと資本家折れ合わず　文蝶

ともなり意地も手伝って双方泥沼に足を突っ込む仕儀となって、

闘争に勝った途端に社がつぶれ　喜由

と言うことになりかねない。

赤旗も振っとれまへん子が生れ　堰子

の理性型も混っては居ても、概ね指導者にはどよく煽られ、群衆心理も作用して濃い色の濁流に巻き込まれ勝ちだ。

病院のストへ薬の五日分　東岸

今日はストやと歯医者から戻り　水客

スト擁なるものが遂に病院、裁判所にまで及んで治る者、助かる可能性をも左右する力を持たせることとなる。ストはまた、

ストは出来る組織が欲しい斜陽族で未成年者の羨望と、

スト決行余波の被害へ頬かむり　十九平

では大人の指弾を買うこととともなろう。ストの功罪論はその道の識者の領分、敢て川柳に交叉させてみれば、川柳の句にすらストの名句は少ないのではなかろうか。

ストの句にもっといい句が生れる時はストそのものの在り方が、世の多くの人々の共感を得、正しく育って行った時ではあるまいか。

川柳も更に前進するためには現代の在り方を考えたい。現代に逆

行し、ブレーキとなっていいものが無いか。現代を諷刺し皮肉り穿ち切れる句筆を掌にのせ得る者は果して誰か。

弁解も揚言も句の上でこそ。短かくなってしまったペンシル、握り難いペンシルの此の短文は除外例としてもらうことに決めて、また黙々十七文字に挑むこととします。年は暮れる。新しい2Bの芯を削って新春を迎えたい。

あやかりたいもの

野村味平

「どんなものや、そろそろ、やろうではないか」「何をやるのかね」「いやストをだよ」てな雰囲気の中で、やらない事には、損や損やと、歳末手当の値上げを要求してのストと出る。だまって居れば、昇給は、おろか、煙草銭にもならない。

当地方にも、H鉄道株式会社と称するのがあって、全県下に、バス、電車を動かしているが、この会社の事業は、独占であるから、毎年、繰返されている歳末ストに迷惑するのは、利用者ばかりで、会社そのものは、スト毎に左程の欠損にもならないそうな、何故なら、ストの解決を条件として、かならず乗車賃の改正と、おきまりの手を打つからで、この値上げした運賃で、乗客が、一人でも多く乗ることに、乗務員が、日頃、協力を惜しまないからである。

今夏であったが、市内の或る、タクシー会社の全従業員が、待遇改善のストを連日に亘って、決行していたが、某参議院議員で、自動車製造販売会社の社長さんは、そんなに、貸付けた車の代金も、満足に支払うことの出来ない、けち臭い会社の従業員が、ストをやるようではと、貸付けた全乗用車を引戻して仕舞ったのであるが、それから幾日も、その会社の従業員は炎天下、車の一台切りもないにも拘わらず、鉢巻でねばり続けていたのが印象的であった。

こう見て来ると、年中、ストの一つもやれずに、不見目なのは、サービス業界（銀行）で、労組を組織しているところもあるにはあるが、多方は歳末ともなると、ストどころか、連日の深夜業で、ここには労基法も、通用はしない、こぼすにもこぼせない為体で、毎日、人様の銭ばっかりを弄っているので、銭の方でほとほと、愛想を尽かしているのか、この界隈では、ほとんどが、ストなどは見うけられない。時節柄、よいことやら悪いことやら。

鉢巻をはずしてストは就業し
賃上げのストの娘がこまちゃくれ
バスガイドストとは別に化粧する

ストライキは消える

児島与呂志

ワッショイ、ワッショイ、デモの騒ぎに成っている間はまだまだ良いのだが、いざスト決行と成るとそれは他の人に対して迷惑を及ぼす事に成る。それを第三者的に考えられぬ私が、川柳人として川柳を通して書くとなると、これを当事者と成って書いては面白く無いし、又書け無いので飽く迄も第三者として書いて見ようと思う。それもこれも突きまぜて思うまま。

スト中止初発静かにすべり出し　庸佑

昭和二十三年、二十四年、二十五年労働組合の花々しい頃を思うと、あの頃の方が楽しく見られる程と云うのは如何にもデモ、ストを起して居ても他日に悪感情を抱かせぬ程、労働者と云うものは労働意欲に燃えていたし、又労働者的粗食に耐えて生活をしていた様にも思えるのでは無いだろうか。それ故皆んな個人々々にしても働く事によって其の労働賃金を得ていると云う信念が有る為に、一つのデモにも生活に結びつく活気が有り、一つのストにも他の迷惑をも顧みる事の出来ぬドタン場的意欲がそうさせて来て、必然的に大向うにも受ける感があった。

スト以来乗ってやらない気が起り　梅志

今日此頃に起るただ単なるお祭り騒ぎ的デモ、ストに対しては、私自身も嫌悪感をおぼえるものである。何故ならば、此頃の労働者（有る会社の本社員）は組合の幹部の人達に何もかもまかせ切ってしまって、幹部は会社と只お座なりのデモを行いストにまで突入させている。しかしその先は社労剛れ合いでしか無いのでは無いだろうか。馬鹿を見るのは他人であるとは私の川柳眼だろうか。

それ以上私も労務者である。話し度くない。現在市交通局は絶対ストは出来ない。此職場にある私は只々労働組合幹部を信じているのである。

背広姿の工員さんの通勤を輸送する私はストの句なんてもう出来んだろうと思う。

ストからの帰りとしって派手に酎ぎ　与呂志

伝家の宝刀

直原七面山

花が咲けば鳥が歌い笛を吹けば人が踊るように、毎年年末が来れば あちこちでストライキが起きます。

しかし、ストは法律によって許された正当な争議行為であり、労働者の持つ唯一無二の伝家の宝刀であり資本家に抗する最後の砦であります。従ってスト権の行使は万人に温い眼で迎えられなくてはなりません。

そして、ストの勝利によって、少しでも労働条件が改善され、労働者の賃金格差が除かれ、労働界に現存するもろもろの矛盾や歪みが是正され、働く人々がより高度な文化生活を享受することが出来るとすれば、例えストが年末であろうが正月であろうが〃スト大いに結構〃と申さなくてはなりません。

私事に亘りますが、戦後間もなくのこと、私はある職場で中国地区執行委員長を仰せつかり、東京

ヒゲそり後に…
●美容衛生剤G11
●アラントイン
●水溶性ラノリン
配合
明色
男性
200円
アストリンゼン

に一年の大半を起居して、いわゆる〃賃上げ斗争〃に従事したのでありますが、その時私は、資本家の労働者に対するあの血も涙もない、〃冷酷な〃〃無情な〃〃非情な〃〃横暴極まりない残酷無比な〃仕打ちを身を持って体験し、悲憤慷慨したものであります。

かつて国会において、〃貧乏人は麦を食え〃〃中小企業の一軒や二軒〃と某々大臣が暴言を吐いて物議をかもしたことがありますが、あれが資本家の真の姿であり詐らざる本心であるといっても、私はさしつかえないのではないかと思います。

資本家は〃金の番人〃であり、〃金の亡者〃であります。

〃人が人を殺すのではなくして、金が人を殺す。〃これが自由世界の資本主義社会における動かすことの出来ない鉄則であるとするならば、これに抗する労働者としての道は、ただスト権の行使あるのみではないでしょうか。

さて、こうして毎年年末に繰り返えしに繰り返えされているストも、その数が一つでも減れば減る程、日本全体が平和に向って進みつつ、近づきつつあるのだという風に信じて、世界緊張下の年の暮れを私達は静かに迎えたいものです。

スト　スト　スト　ポッタンポッタン杵の音

年末スト

永松東岸

越年資金握り年末スキーに居　春巣

この句は十年程前僕が川柳を始めて一番最初にもらった短冊の句だ。この句を思い出して見ると年末ストの性格がはっきり浮き彫りされている。

戦後さかんに行なわれた越年資金獲得斗争も年毎にその影が薄くなって来ているように思われるが、今年はどうであろうか。

斜陽産業に於てはその必要もあろうが、たんまりボーナスでももらって年末をスキーにでも出掛ける階級も多いと思われる。而し年末ストというものは案外深刻さがないように思われる。

僕にはストの経験もないので第三者的な観測しか出来ないが、近江絹糸や石原産業のストのように長びく事もないし、炭鉱のストのように労使のはげしい争いはないようだ。

年末ストの特徴はなんだかんだと言っていても、十二月もなかばを過ぎるといつの間にか解決がついている。ストとしては小型であるが年中行事の一つのように、これ等のストが終らぬと年末がやって来たという気持ちになれない。新聞紙上からこれ等のストが消えるとあわただしい師走である。

ストすめば師走じりじりおしよせる　東岸

師走になるとなんとなくあわただしいというものの、正月を間近くひかえ、金の苦労はしていても心がはずんで来るようだ。やはり子供の頃から正月はたのしいものとして来た習性のようなものがあるのではなかろうか。

正月はやっぱり目出度いし、ゆっくり休めるのも有難い。そんな正月がもう目の前に来ているのだから、労使とも年末ストは平素のストと違っておおらかな気になるかも知れないと思ったりしている。

而し年末ストで列車がおくれたり年賀郵便がおくれたりするようなことがあるとすれば、正月がやって来るのにブレーキをかけるようで甚だ面白くない。個人の被害は大したことがないにしても、去り行く年はきれいさっぱりと送り、新しい年を迎えたいものだ。

つぶれそうな会社に勤めストもなく

ストライキ節

—明治32年12月のスト

不二田一三夫

ストでめしを食っているスト職業人以外は誰だってストはイヤだろうとおもう。働く人たちも、だまって仕事をしていたら、だまっていてもサラリーをよくしてくれるなら、秋田雨雀作るところの〃聞け万国の労働者〃の歌を、バンガラ声をはり上げてうたうこともあるまい。とるほうは千円の金がほしいと二千円ぐらいにふっかける。出すほうも千円でカタをつけようとおもうと五百円ぐらいからハイ上っていく。そこで歩みよったところで握手となる。こんなオモシロクないお芝居に高い税金を払って見物させられる国民こそ災難である。

嘉永元年（一八四八）には、フランス、ドイツ、イタリア等で革命運動がおこっているが、このころに資本家と労働者の対立が、ようやく激化のきざしを見せてきたようだ。日本では片山潜等によって労働組合期成会が結成されたのが明治三十年で、別子銅山のストライキが明治四十年だから、労働運動も弾圧下の中とはいえ、強い根を張っていたようである。

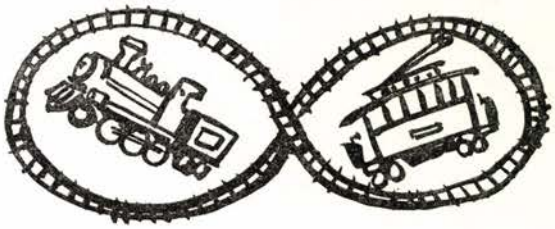
近江絹糸のような女性を主にしたストの元祖は、明治三十二年の十二月におこなった名古屋の遊女屋「東雲楼」のお女郎さんたちではなかったか。

この色っぽい？お女郎ストは、賃上げ闘争ではなく自由廃業によるものだった。このストから〃東雲節〃が生まれ、今日でもストライキ節といって寄席あたりでもよく聞くが、公娼廃止の火ぶたをきった先駆者たちだったことはみとめてもいいだろう。

十月に花月亭九里丸氏から「年賀状」をいただいた。郵便スト等で遅配するだろうから今のうちに〃謹賀新年〃を送っておくというのである。だからボクも賀状を送っておいた。元日の朝、あらためて状差しから出すつもりでいる。というわけで賀状に関するかぎり、ボクと九里丸氏には遅配がないことになる。涙ぐましい話ではないか。

ボクならストなんかしない。そのかわり値段よく買ってくれるところがあったら、アッサリそっちへ移るまでのことだ。多勢の力を借りるのは卑怯ではないか。

こりと痛みに
サロンパス
久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪



ストと改札

—改札口は人生の縮図—

黒川紫香

年末をひかえてまた闘争が激しくストの声も聞かれるようになって来ました。電鉄会社に籠を置いている関係上、どうしてもこのストには無関心では居られないようです。

ストにも全面スト、一部スト、事務スト、改集札スト等々種々あり、特に私等には改集札ストの際、改集札要員として狩り出されるので大変です。

改集札ストと云えば御承知のように出改札員だけがストを行い電車は動くのですから、会社としても無改札でいる訳にもいかず、管理職が狩り出されて、各駅に配置されます。何分小人数ですから大きな駅はとも角として、中間駅になると一人で切符を売り、切符を切り、切符を集めなければならないのですから大変です。便所へ行くにも電車回数の多い私の方の駅では発着の僅かな隙を見て駈け足で済まして来る状態です。

どっと降りるお客さんの切符を受けとり、乗客の切符を売ってパンチをいれる、口では簡単ですが正にラッシュは戦場です。

ストの前日配置駅を決められて朝駅へつくと背広に腕章を巻いて切符鞄をぶら下げ改札につくと妙にどこからか近くの腕白小僧がやって来ます。

「やあ、また小さいおっさんが切符きりをやっとる」

と冷やかしに来ます。これはまだいい方で、

「おっさん、なんぼ（いくら）で雇ってもろてんね」

切符にパンチを入れるのがまた大変な仕事で、別に習ったり練習をしたりしてやるのではありませんからぎこちないものです。

パチパチでなくパチンパチンですからなっていません、おまけに切符は軟券ですから余計切り難い切符の何処かに穴が明けばいい方で、切ったつもりでも切れていないものが多く、往復券の往を復券に切ってしまったり、甚だしいのになると、裸のまま出された定期にパチンとやってあわてる状態です。また子供の声で

「おっさん下手くそやな代ったろか」

定期と云えば期限、区間、性別年令などを一しゅんに見て不正を発見しなければならんのですが、とてもそんな余裕がありません。だがえらいもので少し馴れて来ると定期を差し出す態度で見当がつくようになって来ました。

切符を売るのも仕事の一つ、臨時改札員ですから、とても各駅間の運賃を覚える訳にはいかない。いちいち渡された運賃と首っ引きで売る訳です。まごまごしていると、

「いつまでかかっとるんや、早よせんかい、電車が出てしまうやないかい」

と叱られます。そうかと思うと

「○○駅までは六十円や、四十円つりくれたらいいんやろ」

お客さんの方がくわしい。

改札を通るお客さんのストに対する批判もいろいろです。

「チェッまたストかい、あんじょうサービスもしやがらんでストばかりしやがって、また電車賃上げるつもりやろ」

「ごくろうさんでんな、闘争も無理おまへんけど、あんたらは大変でんな」

とぼろくそに云われたり、なぐさめられたり、と思うと、

「あら！久しぶりね、あんた一寸も顔見やへんおもたら改札やったはんの」

と見覚えのない女の人から声をかけられます。こちらがうかつにニヤニヤしていると無賃乗りされてしまう虞がありそうです。

電車がつくと今迄駅前でブラブラしていたのが急に勢いよく走り出して、

「おす！」

とかけ声して電車に飛乗って行こうとするマラソン型、胸から一寸定期の端を見せて通るチリ型、半分程定期券を手で押えて見せるかくし型、これらは一寸臭い方で、その他定期券を鼻先まで突出して行くのや、四つにたたんでやおら折りを戻して見せるやら、いろいろ種々雑多です。

性の悪いのは不良高校生で改札を出るとき列をつくって通るのは宜しいが、先頭が定期を見せると次から、

「同じく」「以下同じく」

口々に云い乍ら出て行く、とがめると、さんざん探す風をして、

「おっさん落した」

と云うので、

「定期券がないと切符を買ってもらわんと」

と云うと、又探す風をして、

「あったあったこれでいいやろ」

と見せる、はじめから計画的にからかうつもりだからこちらはたまりません。これにかかっている間に他の出入口からどんどんお客さんが出て行く。

改札を出る時渡される切符にもいろいろの型があって、もみくちゃにしたもの、こよりのようにしたもの、小さく丸めてこちらの手の平にポトンと落して行くもの等々、一々拡げて見ている間にその人達はもうそこらにいません。

しっかり握っていたのか切符が汗でびっしょりになっているのや、渡すとき念仏をとなえ乍ら渡して行くおばあさん、可愛らしい紅葉の手でむりに母親から切符をもらって、

「へいおじちゃん」

と渡してくれるほほえましいのもあります。

袈裟御前

冨士野鞍馬

死に縁があって名までが袈裟御前　（タル五八）

袈裟御前。人名辞典には、「節婦。渡辺渡の妻、遠藤盛遠に迫られ、夫に代って死んだ。」とある。袈裟の母は衣川といい、その甥が盛遠である。盛遠は、イトコの美しい袈裟に前から恋慕していたが、渡辺渡と結婚したのでひどく立腹した。そして伯母衣川に袈裟をよこせと脅迫した。盛遠は性来乱暴な無茶な男であるから、どんなことをするかわからない。それでやむなく袈裟は盛遠に夫さえ居なければ従うという返事をして、頭髪を男のようにして夫の寝所で臥した。だまされるとは知らず、盛遠は渡の寝所へ忍びこみ、首を斬ったが、それは死を覚悟した袈裟御前の首であった。

これは芝居にもなっていて、この時盛遠は十八才といわれている。

伯母が聞いてるに遠藤させろなり　（末　二）

這いかける時は遠藤武者ぶるい　（タル一一六）

と川柳は、その前も詠み、

袈裟御前野郎頭になって死に御前　（万安四）

撫でどこが違ってむごい袈裟盛遠は元手失うことをする　（タル一〇六）

（〃二一）

文覚は一ぱい喰った坊主なり　（拾　五）

などと詠まれている。

そこで盛遠は、ほん然と悟って出家になり、盛阿弥と呼び、後、修業して文覚となった。

女にはえんどう武者とあきらめる　（傍　二）

美しい袈裟で墨染一人出来　（タル八九）

盛遠はゾブもとらずにゴソリ剃り　（〃四三）

煩悩の袈裟が菩提の善智識　（〃八一）

執着の袈裟盛遠の発菩提　（〃一〇二）

袈裟を見てから盛遠は出家する　（〃三二）

手にかけた袈裟を涙で首にかけ　（〃四二）

袈裟を手にかけて其の後首にかけ　（タル一五三）

文覚は袈裟をみるたび思ひ出し　（〃九六）

と、川柳は盛遠出家を詠んでいる。

あとに残った渡辺渡もまた、浮世をはかなみ、貞節な袈裟の冥福を弔うため出家した。それで、この事件で二人が坊主になったことになる。

野郎の女で法師が二人出来　（万天六）

一人の袈裟で出家が二人出来　（〃五八）

袈裟が無くなって衣が二人出来　（万安七）

と、これも川柳に作られている。

文覚が、この罪業消滅と修業のため、紀州那智の滝に打たれ、七日間断食の荒行をしたことは、これも芝居になっている。

袈裟を打ちわが身を打つは那智の滝　（タル八二）

濡れごとの二度目那智の滝をうけ　（〃二七）

恋で世をすて荒行で世にひびき　（〃六一）

文覚のことは、平家物語にも書かれている。

袈裟御前の菩提をとむらうために、京都下鳥羽に、「恋塚」が建てられ、また「恋塚寺」も建立、そこに、嘉応元年（一一六九）文覚作という袈裟、文覚、渡辺渡と三体の木像がある。そしてまた長唄「鳥羽の恋塚」にうたわれている。

忙しいだけに時間のたつのが早い、昼がすむと直に夕方のラッシュがやって来ます。まごまごしている中に夜になって来ると少し暇になります。何処からか娘さんや未亡人らしいのがやって来て、退屈しのぎに改札へ話に来る、映画の話や、世間ばなしをもち出して退屈をさせない、改札員が割合もてると云う話を聞きましたがこんなところから来ているのかも知れません。

終電近くなると酔ったのがやって来て、乗るでもなし、降りるでもなしさんざん同じ言葉をくり返して、酒の肴にすると、しまいには駅のベンチで寝転んでしまって終電が来ても起しても仲々起きない、てんで始末におえない人も出て来ます。

思えば改札の一日も人生の縮図と云って差支えないと思います。

福壽丸
心斉橋筋大丸前
電話㉗三三四四番

句評リレー

堺市　八木摩天郎
大阪市　米沢暁明
加賀市　野村味平
大阪市　西川晃

人に相談して俺にも相談し　むしな

摩天郎—他の人に相談して、なお且つ、僕にも相談しで聊か軽視され、比較され、参酌的で真剣に僕のみに頼る相談と思われないので、何だか馬鹿にされたような憾みは無い事はないが、句の裏に秘む、信念なき人の悩める相談事で他の人にも、僕にも相談せねばならぬ人殊に未亡人の今の世相のきびしさに悩む処世の相談の判断事が秘むと解したい。相談しての「て」僕にもの「にも」の措字が力強く句を生かす事も見逃せないと思う。考えさせられる句だ。

暁明—軽視とも重視とも取れる。どちらでも味わいのある句だ。又ああか、こうか迷える仔羊という人間的弱味も大きく浮かび上って来るのを覚える。そこらにそして度々出喰わす平凡な材料を巧みに捕えた句だ。未亡人という特種な位置を考えると、相談の枠が急に拡がるし益々ロマンチックになる。むしろ「て」は省いてよいのではないか。こう書いて後川雑五月号を開くと、「人に相談し・て・俺にも相談し」だったので、原句に賛。杞憂解消。

味平—この句を、饒舌好きな、未亡人であると想像して見ると、今の先まで、身の上相談を掛けていた椅子一つ隣りの、相手の面前で、そんなことは、忘れたかのように、前と同じ話術で、相談を持ち掛けている場所にぶつかることがあるが、こんな席に居合すと、いかにも、なぶられたようで、妙な気分にさせられるもので、世間によくある例を、軽妙に旨く表現させている句であるが、字句の構成上に少々は、無理が生じているのではないかと思うけれども、九九で切って読ますとすれば、これでよいのか知れないとも思われる。

晃—「貴方だけが頼りなんです」と言って、さも初めて事情を打明けるような口振りで相談されたに違いない。全く人を喰った態度である。だから作者が腹を立てた。そう解しないと暁明氏の言われるように、軽視とも重視ともとれて此の句の意味が散漫になってしまう。此の句から特に未亡人を想定するのは、飛躍が過ぎるようである。破調にした事によって救われている句だと思う。

摩天郎—性別も、年令層も、句の上では勿論判らない。未亡人であるとも勿論断定しがたい。しかし、他の人に相談しててで、相談して居りながらで、なお且つ相談せなければならない「迷い」ワンマンに判断し切れない人の悩み、親身に相談する人もなく、相談する見は小さし、うちの人が居たらと、そんな深刻な程でなくとも、人に目下相談してて、俺にもと、二途かけている人、二途かけなければならない弱者の迷い。何だか馬鹿にされた腹立しさ、しかし、相談する側の立場も考えて世情きびしいから来る現象かと思考する世間様々、平凡な材料、しかし深く考えても見、味わっても見るべきか。原句に賛成。

暁明—川柳的観点に立てば、軽視と解する方がおもしろい。相談する人間の弱味も、される方のてれくささも……ように表現されて面白いからナア……。

味平—どうにも、納得が出来ないのである。これまでに幾人かに相談を持ちかけているに違いない。人間の弱点を旨く風刺していると思う。

晃—批評に暖かみを持つということは大切であるが暖かみのある批評とは、決して当らず障らずの生ぬるい批評や、べた褒めの批評を言うのではないと思う。（誤解されると困るので断っておくが、これは無論一般論で、今回の句評を指しているのではない。）作者と作品に愛情をもちながら、而も厳正率直な批判をする事が、暖かみのある批評の真意であろう。忌憚なく言えば、此の句は人情の一端を捉えてはいるものの、現代の世相を表現しているという程の新しさ（今日的意義）、も人間の弱点をうまく諷刺しているという程の内容のある句とも私には思われない。むしろ平凡という部類に入る作品だと思う。ただ破調にし

株式会社 丸越
電気器具
瓦斯器具
雑貨
洋装品
靴鞄
家具
呉服
婦人服店
紳士服店
アベノ店
吉野店
住島店
平生店
都店
蒲生店
堺店
大阪市阿倍野区阿倍野筋三丁目六〇 電話 ㊥ 3957・3958
大阪市住吉区長居町三五 電話 住吉 ㊥ 4985・4986
大阪市東住吉区平野新町三丁目一 電話 東住吉 ㊥ 2110・9814
大阪市都島区都島本通三丁目104 電話 921—7459
大阪市城東区蒲生町四丁目二八 電話 大阪 ㊥ 1445
堺市熊野町東一丁一 電話 堺 2局 3587・1600
良い安い買よい　十カ月払
月賦のデパート

て、ずばりと言い切ったことによって、内容の平凡さが大いに救われている事は認められる。

○

儲らぬ麥だが播くのが樂しゆうて　尚史

摩天郎—私が指導している富田林市の富柳会の逸材として、将来期待している作者の句、田園都市に住む作者が、打算的には儲けにならぬ麦であるが、で百姓で無い事も、農家で生計を立てて居らぬことも判るが、只管播いて其成長を楽しんでいる日々の生活、今日よりも明日、日々新に、希望をつなぐ作者の心持が思ばれてうれしくなる句だ。路郎先生の一人子のどんな玩具も淋しくて、のように下五の楽しゅうてに無限の喜びを表現している。心境句として楽しうてと余情を持たせた所を買いたい。

曉明—「楽しゅうて」に句の全生命が掛けられている点は肯定する。然し例句の「淋しくて」程の余情は持っていないと思う。句の内容は正しく、美しい素材であるが、〃川柳〃的に深めて考えると、唸る程のいい句だ、とに稍受取りにくいと思う。きれいな得な句だ。

味平—耕作する者の心境が、余すところなく詠まれていて、一見ほのぼのとさせられる句ではあるけれども、暁明氏の言われるように、私にも、それはどに飛び離れた秀句とは思われない。

晃—いのちを育くむ者のよろこびを詠った中に、金銭万能の世に対する作者のささやかなレジスタンスも見られるので、その心境には共鳴するが、表現が安易に過ぎるので、内容が上すべりしてしまっている様に思われる。摩天郎氏に逆らうようであるが、此の句から作者が百姓でないという事は推定できない。百姓であった方が自然で、その方が句としても深みがあると思う。

摩天郎—僕は勿論飛び離れた秀句とも、唸る程のいい句とも云っていない。しかし、下五の余情を残した作風と「川柳雑誌」は伝統として心境を詠むということをいっているのでその作風に馴染んで呉れている。句上では百姓でないと想定しきれないかも知れぬ。しかし、大百姓は麦を作るが小百姓は麦を作らぬ、交通網発達で、サラリーマンに、儲からぬ麦で、片手間百姓、日曝百姓の類か。

曉明—百姓専門であろうと、片手間百姓であろうと、それはどちらでもよい。尚余情を残した作風に敬意を払う事には私も不賛成ではなかったのであるが……。

味平—主観とすれば、耕作に勤む者の醍醐味が、客観とすると、皮肉ではなくて、寧ろ感謝の念が溢れているのだろうと思う。

晃—適切な例かどうか自信はないが、「儲からぬ川柳だが創るのが楽しゅうて」という句を考えて見たらどうだろうか。此の程度の表現と心境で、川柳作家が満足していられるであろうか。こんな浅い気持で、決していのちある句は作れるものではない。作者はもっと川柳に苦しまなければならないと思う。もう一歩深く突込んで観察し、思考し、表現してこそ、そこにいのちが流れてくるのではないかと私は思う。然し作者は全くの新人らしいので或いは私の言う事は、少し無理かも知れない。とにかく作者の円満な人格には敬意を表しておく。

○

ペチャクチャペチャクチャ男性飼育法　涼人

摩天郎—ペチャペチャとよく喋る女性の、得意然たる男子飼育法の対話、聞き手もまた女性であろう。話し手は、結局賢い部類に入らぬ女だ、尻にひく女で、まざまざと自分の愚、夫の不甲斐なさを喋っている女性の様子が、よく表現されている。ペチャクチャの畳句で、よく喋る様も判るし、男性飼育法の近代語で、話の内容も判る。しかし、女性ならではの国か知らないが、こんな下五の文字が早く抹消される世の中になって欲しいものだ。

曉明—男性として飼育法など失礼千万と思う言葉であるが、ペチャクチャペチャクチャを受ける言葉として男性飼育法という言葉が一番マッチしているものと思う。ペチャクチャの中には、愛も憎も笑いも、悲しみも！　そして「のろけ」さえ覚えて勝手なことを喋舌る女性が目に見え、その声が耳へ届きそう。喋舌るだけ喋舌しておくのも女性飼育法と達観すべし、？

味平—いささか、持て余し気味に詠まれているので、わたくしのような、口下手な者には、ペチャクチャで、どうにも二の句が告げないような隙のない句だ。

晃—「戦後強くなったのは、酒下と女性だけだ」とよく言われる、悪口や泣言だけであった女性のおしゃべりが、堂々と男性飼育法を論ずるまでになったのだから大した進歩である。此の句、現代女性の一断面を軽くスケッチしている。これと同じ手法で、以前に木村千容氏の**ガヤガヤガヤガヤ鳴乎日本の民主主義**という句があった。

摩天郎—勿論、戦後殊に現代女性の断面のスケッチであり、ペチャクチャペチャクチャと男性飼育

法と云う言葉がよく極め手をなしている。作者の言わんとする所充分云うている。男性飼育法は、あながち男性側だけでなく、女性側も考慮すべきか。句は、今の世相を巧く、つかんだ句である。

暁明—但しその飼育法たるや、安易な、くだらぬそして飼育法と言えるかどうか実につまらぬものかも知れない……など考えると、又ペチャクチャがおもしろくなってくる。

味平—週刊誌仕込みの飼育法を振り廻しているのだわいと思うと、一寸、微苦笑もので、耳に掌を当てたくもなる。

晃—此の句は、軽いスケッチのようではあるが、又一面、現代女性の軽薄さを痛烈に諷刺した句でもある。昔の女大学式の貞淑な女性を求める作者には、現代の女性の生態は目に余るものがあるのであろう。封建的な亭主関白の名残りを多分に持つらしい作者の面目が躍如としている。表現技巧の巧みさが、此の句のすべてであるが、私が先に例にあげた木村千容氏の句に、その表現手法の先例があるので、此の句は相当減点されることは覚悟せねばなるまい。

○

殺人犯を酸素吸入までして生かし

草石

摩天郎—殺人犯に、酸素吸入、その対照で奇異の思いがする。しかし、罪と人は別、罪を憎んで、人を憎まずか。法治国の国としては、法は厳正であり、法を犯した者には、きびしい。しかし、人間の尊さは変らない。法にも涙がある筈である。殺人犯罪は大罪であり、酸素吸入は、人の命を延す、苦みを楽にするものとして、殺人犯を酸素吸入までして生かしと、そのコントラストが、本句を生んだのだろう。私は、までして生かしを、までもして生かしと、もを加入したい。

暁明—いい句です。一々説明の必要はない。よく解る句です。事件解決の鍵に対する懸命の人間の努力さえ窺えて、有難いことである。句主に失礼であるが、「殺人犯へ酸素吸入までもして」……では意に満たされないでしょうか…

それとも、医師としての句なら原句となり生かすことが出来て、初めて医師の心理の機微脈々と波打つを覚える。

味平—アリバイの成立までは、酸素吸入までもしてでも生かして置く、裁く者と、裁かれる者との息づまるような葛藤が、繊細に詠まれていると思う。

晃—人命より現場保存に重点をおいたから、釜ヶ崎事件がおこった。人命は何よりも尊いものである。然し殺人犯を酸素吸入までして生かすのは、実は人命尊重ではなくて法執行の便宜上かも知れない。いずれ死刑になるような極悪人をそうまでして生かしている一方で、善良で貧しい市民が医者にもかかれず死んでいく。こんな状態をも作者は考えたのではなかろうか。私は原句のままでいいと思う。

摩天郎—医師としての心理から又その職業柄から生まれた医師の句として、いい句である。原句で勿論結構である。併し一般例から見た場合「までもして」生かす、人命論も法手続からも、裁判上からも解決の鍵、殊に晃氏の云う善良な貧窮の市民で社会面の一節を想うと「も」を入れて「までも」と句意を強めただけで他意はない。

暁明—医師として又検察側の立場に立つと「生かし」となるだろう。私はこの立場からいうと原句がよいと思う。然し、客観的にこの句果して医師の句と言えるかどうか。第三者に立つと又自ら違う表現ともなる可能性はあるにはある。勿論原句でいい句ですという気持に変りはない。（句主はお医者様なのですか）

味平—これは、法の弱さを、すばりっと、皮肉ったのでは、ないかとも思われる。

晃—句主は医師である。此の句は八月号の「名句と難句」の中で、路郎先生が懇切に解説されているので、今更私がじょう舌を弄する必要はないのであるが、然し作者を知らずして此の句を見た場合に、暁明氏が言われる如くこれを医師の句と気づく人は、おそらく少いであろう。作者が医師である場合と、単なる傍観者か又ははんの思いつきで此の句をつくっただけの人である場合では、此の句の内容も、価値も大いに変ってくる。一般に川柳では主観の句だか客観の句だか鑑賞者に解らぬ場合が随分と多い。これは川柳自体がもつ、どうしても避けられぬ欠点であるのか、或いは従来の表現方法が不充分であったのか、もう一度よく検討してみなければならぬ重大な問題だと思う。

（担当・真鍋一瓢）

★

お願い——

—編集局

はじめて川柳をやりかけた人にどの記事が参考になるかと聞くと「名句と難句」「句評リレー」「入門講座」と答えます。

句評リレーが好評であることは、執筆者諸氏のおかげとよろこんでおります。

十二月はまた運配月ですのでパトンを受けられたら、早い目にご郵送のほどお願いいたします。

なお、原稿用紙へ書かれるときは、発表誌どおりにマスの中へ文字を入れてくださるようお願いします。

雅号だけラン外へ書いたり、ご自分だけ一字下げて書いたりなさらぬよう、よろしくご協力くださいますように。

句評リレーはこんごとも続けてまいります。作家すなわち批評家というだけに、たいへんな仕事だと思いますが、執筆者諸氏のご健筆にご期待申し上げております。

事務用品全般
事務用スチール家具
株式会社 心斉橋クニヤ
心斉橋北詰
電㉕ 4740, 4741, 4742

續・川柳料理暦（七）

水谷竹荘

鍋料理の季節

秋も深くなり、冬めいてくるにしたがって鍋料理が恋しくなってくる。鍋料理といえばふぐのちり鍋が王座であろう。時雨のふりかかる晩秋の頃から春の桜の頃までよくたべる。ふぐのあだ名を鉄砲といって、昔はこれをたべてよく当ったものである。今日ではふぐは絶対に当らなくなった。毎年調理士には、ふぐ料理の試験をして免許制になったからである。しかも、下関から来るとらふぐの本場ものは、ちゃんと現地で除毒までしてあるから火薬を抜きとった弾丸と同じで当る筈がないのである。ふぐの調理法と川柳は、本誌二七一号川柳料理暦冬の巻に書いたから略す。

極道に生れて河豚のうまさかな

という吉井勇氏の句も、鉄砲時代の命をかけての冒険があってこそ、味わえる句と思う。

スッポン鍋

いまからおよそ千三百年前に、すでに私たちの先祖は、スッポンを賞味していたということが「続日本紀」に、文武天皇の元年九月近江の国から白鼈（スッポンのこと）をたてまつる云々と書かれているが、スッポンが文献にあらわれた最古である。

中国でも古くから、団魚会などと名づけてスッポンの饒食を行ったことが古書にのっているが、団魚とは、スッポンの異名で、現に関西地方では、スッポンをまると呼んでいるのも、団魚の名からきた異名である。

古本屋美味求真がやっと売れ　梅志

ふちょうなど使って食通らしく見せ　花車

スッポン鍋は家庭向きとはいえない。生きたスッポンの頭を落すことは、誰もあまり好まないからである。そればかりでなく下手をすると逆に喰いつかれる恐れがある。スッポンの歯は一枚歯でなかなか鋭い。スッポン料理の名人になるには、かなり修業せなければならない。料亭ではスッポン料理は通な酒客向きにできている、というのはおよそ食道楽の道を飽きるほど歩き廻った人は、最後にはきまってスッポン料理に落着くのである。

だから通人中の通人がスッポン料理を賞味するのだから、それだけに料理して食べさせる方の身にしたら大いに気を使うのである。

食通と聞いて板前盛りなおし　須賀太

食通ともなればがつがつ食べられず　千里

スッポン料理は、甲羅を剝がして、鍋の代用にして、そのなかで煮焼した肉を賞味する方法もあるが、最も通な、そして美味な料理法は、土鍋をつかって、汁沢山に煮ながら食べる、いわゆるスッポン鍋である。土鍋に、スープを張り、骨つきのスッポンや腸団子を入れ、野菜には、筍、なめこ、三ツ葉、庄内麩などを使いしのび生姜ですっきり味を、引立てるところがよい。しのびとは、生姜の汁だけをしぼって味をつけるのである。

松茸をひねくって大根買うていに　参無子

野菜高八百屋も困っていると売り　葉光

八百屋から肉屋に廻る月給日　雄々

すき鍋

明治時代の牛肉屋の看板は、二階の庇に四角の掛け行燈を吊し、両側に紅でもなく、生でもない独特の色で、「牛」と書いた、その上に官許としたこともある。それから入口に柿色の生地に白く家号を染め抜いたのれんをかけたものである。

鍋にも種々ある。アルミ鍋、瀬戸引鍋、銀鍋、金鍋まで出来たこともある。しかし鉄鍋が一番よい。朝鮮には石鍋もある。さて、すきやきだが、大阪では葱を先にいためて肉を入れるが、京都では初めに肉を砂糖でまぶす。松阪では、水煮にしてから醤油と砂糖を入れる。この葱は斜めに切り入れるのをザク、小口から揃えて切るのがゴブという。五分の大きさに切るからである。ソリシタは、汁が煮つまってきたら入れるものでこの作り方は各その店の秘法があるものである。

すき鍋に使う肉は、日本では、和牛が第一、朝鮮牛、外国牛、雑牛、の順序で、季節的に一番うまいのは初冬から三月頃までとされている。脂肪がよくのっているのと、寒くなると、生理的によくあった料理であるからである。

スキ焼へ仲居の世帯ずれた酌　梅志

食通の父に手料理さしずされ　奈良子

親しさの酒へ手料理追加され　一ン十

カロリーのことは食通口にせず　立児

すき焼へ紅一点は遠くいる　秀三

どじょうすくいすき焼鍋にけつまずき　五茶

水たき

水たきとは、鶏料理のうちからの鍋物でやはり鍋料理のうちになると思うが、かしわの水たきは、博多が本場のようである。

しかしこれとは別に関東にも江戸風の水たきがある。この二つの大きな差異はどこにあるかというと、博多風のものは野菜が混入されていないことと、水たきの汁が白くにごっている。江戸風のものは野菜が入っていて、にごっていない。水たきの材料は油の少くない若鶏を使うのだが、これを長くふたをして煮ると、どうしても脂肪が分離して、汁が白くにごって臭みが出てくる。だから、博多方面では、いった米をグラグラ煮出した汁を入れて、この臭味を消すのである。ところがもう一つ、こ

の鶏を鍋のふたをとったままで煮ると、にごっていない透明な汁になる。江戸風はこの方法をとっているわけである。

鶏といっても、ひながよく、二つ割にして骨つきのまま、大きさは適宜に切る。鍋は、すず鍋がよい。煮る時間は二時間位、ただしとりの大きさで四時間ぐらいかかることもある。

かしわやの女房になった恐しさ　毒仙

鶏売った鶏小屋早速子等遊び　花村

バタバタバタコケコッコウ寝て居れず　町二

鶏は追いつめられて五尺飛び　古川柳

鶏を追えば踏切越して逃げ　路郎

松茸と味噌汁

川柳料理暦も、秋も深まり十一月ともなれば暖かい毎朝の味噌汁のうまい季節になる。

その味噌汁に入れるみとしての松茸は、どんな松茸がよいかというと、ずんぐりとした、ころ松茸笠がすこし開いた中開き、大きくひらいた笠松茸と、大体この三つの段階にわけられる。

ころ松茸

やわらかくて、どのように切っても、うまくたべられる、しかし姿が可愛いので、なるべく一、五ミリくらいの厚さに縦切りにして原形がわかるようにした方がよい。また斜めに切ってお椀に入れておき、熱い味噌汁をはるのも洒落た方法である。

中開き

笠のつけ根から三センチくらい下の軸のところで切り、縦に六つとか八つに切ればよく太い軸だったら六ミリくらいの木口切りがよい。

笠松茸

笠はそのまま金網にのせ直火で焼き、すぐに指でさき、汁の中へ入れて、みにすれば、うまくたべられる。軸は香りも薄くかたいので、お客料理には不向きであるが木口に薄く切り、せんにしてみとすればよい。

味噌汁に松茸を入れた場合は、さんしょうよりも柚子を浮かした方が風味がある。

味噌汁の湯気へクイズを練り直し　万楽

味噌汁は鍋一杯の子沢山　いさむ

味噌汁に海苔生玉子旅の朝　梅里

日本を離れ味噌汁恋しがり　没食子

初冬の味

果物屋端の方から秋になり　水車

味覚の秋からいつの間にか、そろそろ横なぐりの風が身に泌みる冬が訪れてくると、寒いのは有難いことではないが、ものの味にじっくりしたコクがでてくるので、料理暦の世界でも、最も楽しい季節になる。

舌ざわり冬の味覚のわりの鍋　夕鐘

まぐろがうまくなる、シビの中のトロのさしみの濃脂舌端に溶ける味わいは初冬の魅力のひとつである。川のものでは、ウナギがいよいようまく、海のものでは、ふぐ、山のものではハト、ツグミ、などの野鳥、それから猪、狸汁などの珍味もある。すべて肪脂がのり肉が柔らかく、絶佳の味を発揮してくるのである。又、カキも冬の魅力の一つになる。日本料理の酢のものにしても、殻焼きにしても、土手焼きにしても、カキは割りに安直で栄養価が高い。なんといっても広島ものが一番だが、三陸ものに比べてやや小さく、形に丸味があり、黒い部分の色が濃いので、たやすく見分けられる。洋食のオルドーヴルにもよく適したものである。

味をほめ器もほめて食べ過ごし　美音子

色も香もそえて料理の味ができ　素瓢

味付けのよさは愛情ある証拠　福女

茶の味と茶ぶり

茶の味を書く前に、先ずは湯斗（ユトウ）の味から、知って貰いたいと思う。懐石にはお茶漬けというものがなく、その代りに湯斗というものがあるのである。湯斗とは、御飯を飯器にうつした後の釜底に、一面に薄く御飯を残しておき、この釜を極く弱火に二十分くらいかけて、御飯がほんのりキツネ色になったところに熱い湯をさし、塩で薄味をつけたもののことである。これは中国からお茶が渡来する前のもので、食事の後味をさっぱりしてくれる、そしてお茶とは又違った風情のあるものである。

近頃は湯斗の作り方も簡単になり、洗米をホウラク（フライパンでもよい）でキツネ色になる迄煎り、熱湯に入れて十分くらい煮て、塩加減をするようになった。この方法は古式のものより仕上がりが美しいので、一般に使われている。しかし精進料理では、昔から昆布も何も入れない。ただ玄米の煎ったものだけを使ったものを汁の基本にしている。湯斗は香気が高く、又塩味をつけるので、御飯との調和がよく、番茶、煎茶などより、うまい後味を残してくれる、試してみてほしいと思う。

ほうじ茶の匂ひの中でお茶を買ひ　はるを

お日柄をほめて昆布茶のかげんほめ　修三

茶心があってよかった今日の席　進之介

大和路を訪うて茶粥におそれいり　愛論

お見合と知らずに座る抹茶席　竹荘

茶は酒の毒を消すものであるから、宿酔（フツカヨイ）などで頭のいたいときなど、濃い茶を服用するとよい。それに茶は精神をそうかいにするし疲れをなおす。又眠りをさましてくれて食欲を進ませてくれるのでよいが、余りに飲みすぎると害があっていけない。ただれ目には、お茶で目を洗うとよい。

もう秋の気配熱い茶をよばれ　一乗

商談OK番茶が酒といり替り　俊作

冬の酒の香にはなまこがある。なまこは年末から早春にかけてがシュンであって、黄柚子のあるうちが、うまいのも面白い。なまこは鉄青磯色の中くらいのをえらび、口先を切り腹を裂いてコノワタを出し（腹を裂かず、棒先に布を巻いて、ワタを押し出してもよい。コノワタは酒塩につけて即席の酒肴ともなる）。目茶に入れ、たっぷりの粗塩で振りもみして、ぬめりを除き水洗いして、固くし

コーヒの味
モダン川柳
心斎橋大丸北の辻東へ
御門
TEL ㉗6684
御集会には階上御利用下さい

まったなまこを、茶ぶりにかけるのである。

茶ぶりとは、番茶を入れた湯で湯ぶりをすることであって、まず煮立った湯に番茶を入れ、少しのさし水をして、心持ち温度を下げこの中へなまこを入れ、さっとふり動かし、手早く冷水につけるのである。この時になまこの鉄青磁が冴えて、きりりとしまった感じにあがるのがよく、熱が通って霜ふりとなり表面がゲロイド状に軟かくとろけるようになっては失敗である。

茶ぶりは、なまこを軟かくするためであると考えるのはまちがいであって、生の匂いを抜き、肌のキメを整えるのが目的である。なまこは、あくまでも特有の歯ざわりがなくてはうまくない。それに柚香酢を作って一晩漬け込むのである。一晩おいてから、なまこをとり出し、小口から輪切りにして、天盛りには黄柚子のセン切りをあしらってたべるとうまい酒の肴になる。

この黄柚子は冬至の頃になると大きいのが出廻る。この皮を剝いて細かなセンに切ったのは、カキの醤油焼にふりかけても、うまいし、色々の酢のものに使うと味が風味になる、汁に入れてうかしてもよいし、味噌にも柚味噌というのがある。俳句にも、

柚の花や昔しのばん料理の間　芭蕉

の句がある。

お茶漬け

東京でお茶漬けといえば、のり茶、あられ茶、天茶、鯛茶、などで、酒のあととか、濃厚なものの味を消すために、さらっとお茶漬けでとか、手軽に食事をする時にたべるが、関西では、昔からお茶漬けは朝には欠かすことの出来ないものになっている。それは朝の忙しい商家の人々が多いせいもあるし、勿論経済的ということもある。京都は夕食に、ご飯をたくさんたいて、翌朝はその冷えたご飯に熱い宇治茶をかけて、お茶漬けで朝食を軽くすます風習がある。昼食と夕食には副食を多くつけるが朝はお茶漬けに漬け物、塩昆布時雨煮、なめ物などをつけ、関東のように味噌汁はあまり作らないので、うまい茶漬をたべる為に、色々の漬物が苦心してつくられている。それが今に残る有名な、千枚漬、すぐき、水菜、柴漬け、菜の花漬、茄子の辛子漬などが伝わっているのである。

胃袋に剛染まぬ膳へ畏まり　水堂

味などはおかまいなしの食べ盛り　節枝

お茶漬に常連があるビルの地下　亜酔

いろいろの茶漬

鮭茶漬け　塩鮭に青ジソの葉黒ごま

鯛茶　鯛の刺身、わさびごま、焼のり、醤油

天茶　天カス、シソの葉ごま

しじみ茶　時雨シジミ、三ツ葉、白ごま

わかめ茶　干しわかめ、塩干物、細ねぎ

あられ茶　餅の薄切り、焼塩のり

青唐茶漬け　青トウガラシ、とろろ昆布、塩少々

梅干茶漬け　梅干、粉がつを、焼のり、酒少々

うなぎ茶　うなぎかば焼、ごま

まぐろ茶　まぐろのそぎ身、わさび、もみのり

この外に地方特有の名産で作った茶漬けもあると思うが、普通にお茶漬として、料亭などで出してくれるものは、これ位のものである。

暖簾から見る大阪の塩こんぶ　三司

魚河岸の指が動いて値が出来る　十悟

しかし近頃の若い人は、茶漬の味より、パン食で生玉子の味の方がよいようである。

新婚の二人朝から目玉焼き　竹荘

と時代は変りつつある。そして朝の食事がすむと、

玄関で朝のキッスをして送り　弦月

と料理暦も変って行く。

（つづく）

現代柳人録

（一）姓名（二）雅号（三）別号（四）現住所（五）生年月日（六）出生地（七）職業（八）電話（九）自信の句一句（一〇）川柳以外の趣味（一一）配偶者の有無（一二）川柳に手を染めた年月

（94）永井東北（ながいとうほく）

（一）永井信三（ながいのぶぞう）（二）東北（とうほく）（三）——（四）京都市左京区浄土寺上馬場町九〇（五）明治29年12月3日（六）京都市（七）電器具工事材料（八）7局一九七八（九）**さいならと芸妓の方が高級車**（一〇）読書・観劇観映（一一）有（一二）大正十二年大阪川雑句会から。

（95）傍島静馬（そばじましずま）

（一）傍島静馬（二）静馬（しずま）（三）——（四）神戸市東灘区本山町森三九八（五）明治32年1月3日（六）岐阜県（七）会社員（八）芦屋②七三六四（九）**名子役小学校へ行きたがり**（一〇）読書・旅行（一一）有（一二）昭和二十八年二月

（96）木村十悟（きむらじゅうご）

（一）木村繁太郎（しげたろう）（二）十悟（じゅうご）（三）——（四）大阪市阿倍野区旭町二丁目一一〇（五）明治37年7月28日（六）奈良県北葛城郡磐城村大字長尾（七）煙草小売商・果実商（八）戎64二〇八二（九）**ミス日本頑張りますとはなんの事**（一〇）釣（一一）有（一二）昭和十五年

（97）大久保和三郎（おおくぼわさぶろう）

（一）大久保和三郎（二）和三郎（わさぶろう）（三）安彦（やすひこ）（四）京都市上京区笹屋町大宮西入（五）明治26年1月14日（六）京都市（七）生糸商（八）京都44四五五九（九）まだありません（一〇）読書・散歩（一一）有（一二）昭和三十四年一月

（98）不二田一三夫（ふじたいさを）

（一）藤田怡佐夫（ふじたいさを）（二）一三夫（いさを）（三）筆名七つあり（四）大阪市生野区勝山通り六丁目七十九番地（五）明治40年4月30日（六）東京都神田の生まれ（七）税金を納めるのは稿料だけだから、これでも作家のはしくれになるのかも知れません（八）——（九）自信のないものは出句せず、しかしはめてもらったのは一句もなし（一〇）標語作句はかなにか書いておればご機嫌（一一）有（一二）本誌の合本が九冊できたから昭和二十八年ごろ。

柳界展望

句会

▼本社忘年川柳大会は十二月十日（日）正午から心斎橋大丸北の辻東五〇米北側大成閣で開催、会後引き続き懇親宴が開かれる。柳友お誘い合わせの上多数ご出席お願いする。▼南区医師会文化部香林川柳句会（大阪市）は十一月二十一日（火）午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼コクヨ川柳会（大阪市）句会は十一月二十四日（金）午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪逓信病院句会は十一月二十五日（土）午後二時から五階会議室で開催。▼南海電鉄川柳句会（大阪市）は十一月三十日（木）午後六時半から難波親和クラブで開催。▼富田林市文化祭川柳句会（富田林市）は十一月四日（土）午後一時から正方寺で開催。▼明和研究会句会（西宮市）は十一月五日午後一時から西宮市鳴尾公民館で開催。▼第十五回堺市文化祭参加市民川柳の会は十一月十二日（日）午後一時から府立堺労働会館で開催。▼川雑京都支部句会は十一月十六日（木）夕四条縄手仲源寺で開催。以上路郎主幹出席。▼川雑備前支部句会は十月二十二日（日）横山一声居で開催。▼ひろしま川柳会松茸山句会は十月二十九日（日）午前十時から三滝山で開催▼ひろしま川柳会十一月例会は十五日（水）午後六時から森脇幽香里居で開催。▼かがみ百号記念川柳大会は昭和三十七年一月二十一日午前十時から鏡野高等学校和裁室で開催。兼題は鏡・百・内緒・念願・会場・農、投句は句箋に雅号明記三〇円封入の上、一月二十日迄に岡山県苫田郡鏡野町かがみ川柳社宛。▼池田可宵還暦祝話川柳大会は十一月十二日（日）午後一時から長崎市岡町原爆福祉会館で開催。▼第四回読売・越路時事川柳大会は十一月十九日（日）正午から新潟市古町中央会館で開催。▼函館市民川柳大会は十一月十九日（日）午後五時半から千歳会館で開催。▼第七回熊日川柳大会は十一月十九日（日）午前十時から熊日三階ホールで開催。▼八代文化祭川柳大会は十一月十二日（日）午前十時から八代市横手公民館で開催。

消息

▼路郎主幹は十一月六日午前十時から富田林市の清光園で開かれた堺市友会に出席、席上市長のお求めに応じて「ふるくとも俣には仁義礼習信」の句の解説をされた。▼渡辺暁童氏（愛媛県）は十月二十三日、門司、長崎、雲仙、熊本別府と四泊五日の教育長研修旅行に出られたが、長崎から「悲史哀史伸びゆく町の開国史」の句信を寄せられた。▼中島生々庵医博、中島小石さん夫妻（大阪市）は十一月十八日夜、さんきう会東京支部のために東上された▼黒川紫香氏（豊中市）は十一月九日広島へ出張、幽香里女史居でひろしま川柳会の有志と交歓された。▼関西短詩文学連盟主催第五回作品展の精算と反省の会が十一月八日（水）午後六時から割烹大万で開催された。川柳部門の出席者は路郎主幹生々庵、栗、春果、極里、蕨風子の諸氏。▼中島小石さん（大阪市）の妹さんの良人、丸山信氏が中南米パナマ共和国へ全権公使として赴任されることとなり、十一月二十八日羽田空港から夫妻揃って出発された。日本のためにも、川柳のためにもよい実を結んで下さることをお祈りする。▼若本多久志氏（西宮市）は十月二十七日日産本社会議出席のため空路上京あわただしい出張でもつとめて旅の味わいを求めて居りますと「空の旅馴れれば揺れた方がよし」▼富田狸通氏（松山市）は十月二十八日山陰の旅から帰宅されたが、近々上阪の旅を予定しておられるとのこと。▼米沢暁明氏（大洲市）は十月二十九日校長研究協議会へ出席のため上京、十一月二日には皇居を見学、両陛下から御言葉を賜わり深く感激された。「下着から替え御会釈を賜わる日」▼橋本緑雨氏（大阪市）は十一月二十二日、写真同業組合から名古屋のエルモ写真工場を見学後竹島弁天参拝、三谷温泉一泊、豊川稲荷参拝をされた由。▼月原宵明氏（新居浜市）は十一月十八日から山陰の旅行を楽しまれた。暖冬で山陰の実感が伴わず松葉ガニの味もしっくり来ませんと、「大阪の訛りで大山そばを賞め」の句信を寄せられた。▼山田季賛氏（広島県）は十月二十二日松山市に出張、道後温泉に一泊翌日市内見物された。「飛行機は乗れず瀬戸海船の旅」又、十一月二日には

富田林市文化祭川柳会（十一月四日）

写真説明—前列左から、西田菊子、置田ふじ、八木麟天郎、淺川八郎、武生路郎、藤岡友子、岩田美代、後列左から、林芝子、亀伸街史、辻圭本、阿部柳太、小路羅一、水田六竜子、知光存天、松本吉太郎、弥酉凡太、黒谷静林庵の諸氏。

忘年会には
あたたかい すき焼と 鍋料理
もみじの名所
竜田大橋下車
料理は一流値は三流
酌は有芸仲居揃い
予約申込み受付
大阪連絡所（天王寺九六五六）
竹荘、竹青へ
電話竜田一六二一

岡山市に出張、所用の後、長船町で富有柿狩をされた。▼木下一休氏（和歌山県）は国立延寿浜療養所で斗病を続けて居られるが、最近やっとギプスから起き上られるようになられた。速かな御快癒をお祈りする。▼越智一水氏（今治市）は業務と労働運動で忙しい日を送っていられるが、わけても十二月は年賀郵便の取扱いで忙殺されますが、賀状を喜ぶ人々の顔を思い浮べますと残業も苦にはなりませんと。▼田口麦彦氏（福岡市）は法律の勉強と川柳の精進に忙しい日々を送っていられるが、どちらも道遠しの感があるばかりでその兼合いに苦しい思いをしますが、法律必ずしも無味乾燥でなく、これもひいては川柳の勉強と思って頑張っていますとのこと。▼尼緑之助氏（出雲市）は令息の結婚の準備に忙殺されていられるが、十一月五日一畑寺ドライブウエイ完成記念県下川柳大会に出席された。▼坂上山椒坊氏（布施市）は十一月五日退院、自宅で静養を続けられる由。▼河本南牛史氏（愛媛県）は川柳雑誌十一月号の近作柳樽欄での巻頭三席五句入選に大いに意を強くされ、尚一層の精進を披瀝する寄信をされた。▼長谷川三司氏（尼崎市）はここ五六年来起らなかった宿痾の坐骨神経痛で好きな句会にも出席出来ず大いに弱っておられる。▼河相すゝむ氏（西宮市）は十一月十五日上京、所用の余暇を割いて上野美術館でのフランス美術展を見学された。一八四〇—一九四〇年間の代表作を歴史的に従ってアレンジーしてあるので非常に理解を深めることが出来、絵画の底にも歴史の背景が流れていること、デッサンというかその基本を身につけての進展は川柳に於いても同じだということなど大いに得るところがありましたと。

慶　弔

▼尼緑之助氏（出雲市）の長男修一氏は十一月九日出雲大社で華燭の典を挙げられた。お慶び申上げる。▼松下芋人氏（境港市）は十月二十五日死去された。謹悼。

転　居

▼横倉漫多郎氏（大阪市）は大阪市南区内安堂寺町通一ノ二五カナモリ看板工芸社内へ転居。

電話番号改正

▼麻生アート氏（奈良県）の電話が自動式になったのにしたがい番号が左記の通り改正された。○四三七局二〇二七番。▼河村瑞川氏（大阪市）の局番改正、（七六一）二二二五番。▼岩崎一伸氏（大阪市）の局番改正（七六一）五三七六番。

正　誤

▼十月号七頁下段十五行目の句「閑め」とあるは「閉め」の誤りに付訂正。

不朽洞の人々

山陰急行バス観光部の女運転手氏

未だ光った靴もよう履かず

（貴　山）

遠い事だろう。

毎朝、老妻が磨いてくれる玄関での靴は、光輝いているのだが、テクテク歩く職業の毎日に、すぐに光が失せてしまう。

しかし心の灯は、いつも明るく、光り輝やいて、暮してゆきたいと念願している。

不朽洞会から

★臨時幹部会

十一月七日夜、関西会館で臨時幹部会が開かれ、本会参与武部香林氏退会の件について懇談した。同氏が本会に尽されたのに対して是非慰留したいのであるが、目下の氏の心境を尊重して退会を承認すること、退会後の同氏を洞友に推すことなどが議せられたが洞友は同氏の受諾を要する問題などで、その後路郎師、生々庵理事長から書面を出されたが住所不明で保留となった。出席者—中島生々庵理事長・若本多久志副理事長・川村好郎参事・西いわを参与・麻生路郎師

★退会—徳永鬼美氏（尼崎市）は家事の都合で三十六年八月限り退会された。（多）

★武部香林氏・武部若菜女史（岡山市）夫妻が九月限り退会された郷里岡山市に帰省一年余、ひたすら静養に尽され、やや快方に向ったが、四囲の環境が騒がしく、心身修養のため再度旅に出られることを決意され同時に本会退会を表明されたのであった。

くもの巣

尼緑之助選

デートする二人にくもの巣からみつき　青花
蜘蛛の巣を払うてかえる独り者　周甫
雨近しくも軒下に巣を作り　岩井
くもの巣に頭借られた地蔵さん　木魚
くもの巣をつけて証拠を探し出し　和三郎
くもの巣がゆれて台風近くなり　涼髪
オートメの不覚くもの巣に邪魔をされ　保夫
つぶやいて又くもの巣に引っかかり　たけお
くもの巣にいんま逃がした赤とんぼ　勝子
くもの巣のあては明日の風が吹く　可住
くもの巣がはって叩けば鳴るラジオ　静水
夕焼のくものしぐさに孫を抱き　独仙
くもの巣の奥でくしゃみを押し殺し　どんたく
巣を逃げてくもは天井でじっとする　隆史
くもの巣のこわさを蝶も知っており　大八洲

一路集

くもの巣をはらい赤本探し出し　句念坊
くもの巣もその日ぐらしの台所　草々
くもの巣にいたずらをする塵払い　雪美
くもの巣へ新聞配達鞄を立て　一峯
くもの巣一つを保健所見逃がさず　藤波
くもの巣を感心している独り者　ろ亭
くもの巣に露あり蜘蛛は芸術家　涼人
くもの巣をつけて本番ベルが鳴る　庸佑
くもの巣へ子ぐも小さな巣をつくり　愛鳩
くもの巣をじっと見つめて待ち呆け　むじな
家ぐもの巣を掃除器が丸呑みし　生薑
よい買手くもの巣払う骨董屋　雄声
くもの巣をひやかす落葉の赤い色　好女
神棚にくもの巣を張り一家無事　旭峯
くもの巣のようにラッシュのバスは散り　雄水
くもは今王者の如し糸を張り　孝風
忍び来てくもの巣だらけ慌てだし　ごん太
くもの巣の張った国宝見て帰り　博
くもの巣のように借金つきまとい　南天
赤い灯へくもも餌を取る網を張り　同
大糸にぶらり風待つくもの智恵　圭井堂
くもの巣へかかった虫に似るポン中　一鶴
巣をかけるくもの根気にはげまされ　同
くもの巣の仕上げ夕焼空を這い　万古
くもの巣に朝の散歩が引っかかり　同
くもの巣にくも居ず三日月もう寒い　光道
女神像乳房にくもの巣が張られ　同
くもの巣のように絡んで愚連隊　光福
くもの巣に腰を抜かした胆だめし　同
台風一過くもも復興の糸を叶き　光郎
くもの巣を払いスコップ貸してくれ　宗太郎
国宝へでんとしてくもの巣をかまえ　同
くもの巣があってひっそり非常口　光一
仁王さんやぶ蚊は蜘蛛の巣にまかせ　同
くもの巣がにらむ仁王の眼をふさぎ　ひろし
くもの巣も見せて国宝金をとり　同
猫の恋くもの巣つけて帰って来　雄峯
くもの巣をつつけばくもがのそきに来　同
くもの巣を顔で払った山の道　古心
朝の露宿してくもの巣は重し　同
今あてたパーマへくもの巣遠慮せず　圭水
張り込みの顔へくもの巣からみつき　卯之助
くもの巣に蝶の片羽が風に舞い　同
くもの巣のくもは知らない原子力　雄々
くもの巣でベッドが気付く隙間風　同
鼻髭にくもの巣つけて大掃除　同
くもの巣を払い借家の下見する　南牛史
電灯がここにもくもの巣あるを見せ　同
くもの巣がこんなにあった霧の朝　十九平
くもの巣を通して秋の月を賞め　同
独房の窓くもの巣までが閉じ　同

佳

核の如く蜘蛛くもの巣の心に坐し　どんたく
電化せぬ台所くもの巣も煤け　光郎
くもの巣がつるべ落としの陽にはえて　古心
くもの巣へ山下画伯舌を巻き　ひか平
くもの巣を袈裟切りにして濡れ燕　恵二朗
落ちぶれてからのくもの巣気にならず　涼人
くもの巣のある玄関へ執達吏　圭井堂

人

くもの巣にさんまの煙及ぶ部屋　八九寸
追いはぎのように巣にいる蜘蛛の貌　卯之助

地

閉病記巣を張る蜘蛛も友のうち　涼人

天

くもの巣にわが家のくらし見くびられ　涼髪

新型

西　いわを選

新型を着れば行く先たずねられ　周甫
新型という特急の乗りごこち　庸佑
儲かれば買う新型をのぞくだけ　涼人
新型の足のふらつくハイヒール　藤波
新型へ研究室の灯が消えず　可住
新型の魅力アクセル踏み違え　圭井堂
新型へキャキャキャキャ女学生騒ぎ　保夫
新型が出るから待てと言ったきり　光郎
スマートな体に似合うニューモード　雪美
音もなし新車のあとをぼろ車　初甫
新型を着てる誇りも戎橋　草々
新型が走ってダイヤが狂い勝ち　弘村
釈放の汚職を運ぶ新型車　和三郎
新型が鬼角明治の気に入らず　勝子
新型のズボン昔の車夫に似て　光道
新型が来る踏切の人だかり　南天
田舎でも豆腐切ったような家が建ち　清風
ケースだけ変えて新型でき上り　雄声
新型が出たのに月賦まだ残り　雄峯
新型へ去年の型が嫌になり　孝風
ライバルは新型負けておれぬなり　十九平

佳

新型の水着は渚歩くだけ　旭峯
新型を着たマネキンに呼び込まれ　川澄
世の声は聞かず新型核兵器　どんたく
新型が弱い女の虚をつき　光福
やどかりが新型貝と見て移り　光郎
新型へ指紋を残す展示会　宗太郎
新型を入から見よい位置におき　圭水

人

新型と云うそのふれ込みにひっかかり　庸佑

地

新型の日除けにならぬのをかぶり　八九寸

天

新型の血が一億の眼を集め　涼人

軸

新型の二人は別な趣味を持ち

休診

吉田圭井堂選

休診の札にストとは書いてなし　涼髪
値上げまでストとも云えず休診す　不酔
よう空いてる思もたらなんぞ休診か　みのる
看護婦も和服で憩う休診日　隆史
カーテンの白さ眼にしむ休診日　初甫
急患にパチンコ屋まで呼びにゆき　たけお
休診のゆくえ看護婦だけが知り　晃康
休診ですと看護婦不愛想　勝子
休診の日の女医さんの割烹着　可住
一斉休診医は仁なりは過去のこと　涼人
休診におまわりさんのちから借り　弘村
休診へ碁石のひびく昼下り　大八洲
やけくそのように休診叩かれる　万古
技工だけ来てる歯科医の休診日　淀月
休診の協定破ることも出来　南牛史
週刊誌積まれたままの休診日　光一
休診日パトカーだけ目はを廻し　繁太郎
休診へ又も急患運ばれる　庸佑
頓服を呉れて休診明日にされ　藤波
急患に踵ぐ急患の休診日　八郎
休診に看護婦さんもダンスをし　清風
院長の風邪がこじれて休診す　宗太郎
休診の釣りする先へ来る患者　光郎
休診の掲示忘れたまんまなり　八九寸
看護婦のプラン休診日のデート　祥月
交通の事故休診へ遠慮せず　雪美
休診へナース和服で痛みどめ　照児
勝手口から一服たのむ休診日　句念坊
休診の今日は茶の間で子の相手　草々
休診で調子を試めすキャデラック　雄々
休診にしといて馬券買いに来る　むじな
休診を明日に看護婦気もそぞろ　恵生
キャバレーで先生に逢った休診日　南天
休診へ漢方薬で済ませとき　独仙
物干に白衣がゆれる休診日　紫
急患に追われて暮れた休診日　春生
ストを妥結して休診のビラをはぎ　愛鳩
では俺がと掛合ったが駄目休診日　ごんた
休診の朝は受話器を外すしとき　生薔
とりついでくれず休診日の電話　卯之助
雨降りへ碁敵が来る休診日　旭峯
たまさかに病めば因果な休診日　好女
午後休診菊の手入れに忙がしく　古心
休診に昨夜の患者気にかかり　圭水
休診の予定でプラン練ってみる　孝風
休診のパパに宿題見てもらい　十九平
休診日に限っておこるお腹いた　野迷路
朝だけは休診と云う二日酔い　周甫
休診日運転免許まだとれず　光道
真夜中も休診もない田舎医者　秀峰
骨休みせいと休診降りつづけ　恵二朗
釣道具揃え休診日が待たれ　蜻蛉

佳

休診日医者探す間に癒って来　紅
臨時休診続いて変な噂立つ　ひろし
だらすけでも飲ませておこう休診日　友子
休診の奥で誰やら診てもらい　静水
きいっけゃ今日はお医者の休診日　一峯
休診の今日は日曜画家となり　雄声
一斉休診国会ゆさぶられ　一鶴
休診へ神経かいな痛み出し　保夫
休診日診てはもらえず吠えっかれ　木魚
休診日医者殺生をしに出かけ　どんたく

人

急患が来るとあかんで出ると決め　雄峯

地

先生は観世と知った休診日　和三郎

天

はやらない医者も閉めてる休診日　蛙水

色紙短冊
書画用品

金泥集

選乃葭生麻

課題「刺戟」

逆なでのような刺戟に堪えられず　阿茶
伝導が鈍く刺戟へピンと来ず　同
ノーモアメガトンメガトンと刺戟され　同
土曜日の午後は刺戟の要る若さ　きさ子
刺戟にも飽いて故郷へ荷をまとめ　同
御近所の嫁入り母を刺戟する　同
刺戟ない日々が無限に肥らせる一栄
わさびまた大の男を泣かせたり　同
何見ても刺戟をうけぬあはらしさ　同
蝶の刺戟巣を焼きうちにされとも子
お隣りに刺戟をされた旅カバン　同
養老院でまだまだ刺戟追う女　同
強烈なリズム刺戟に酔えぬ年　酔夢
刺戟から遠く病窓秋深かむ　同
恋人の刺戟内気な娘を赤に　同
強烈な刺戟がほしい夜の孤独　都詩子
刺戟にも慣れて都会の渦に住み　同
サングラス刺戟をさけるとは見えず　周甫
赤線街の刺戟に子供ませて居る　同
言い負けて刺戟を求めウォッカー　清子
ライバルが刺戟になってファイト燃え　同
刺戟なき暮し平和な菊作り　勝子
若夫婦に刺戟せられて老らくの　同
刺戟の逃避聖書を開いて居　美喜
ふさいでもふさいでも刺戟する都会　同
アルサロの刺戟恐れて家をかえ　徳子
勉学は刺戟の多いとこをより　同
立志伝刺戟となって書を励み　奈良子
ラブシーン刺戟されない齢になり　白美
アパートは人の刺戟でピリピリし　カネ女

次回題「あみだクジ」〆切十二月末日

★思い出★

新岡回天子

澄みきった青空、瞬く無数の星を眺めて床机に横になって居ると、打水の涼気が身に泌みて、ヘチマの葉ずれの音も快い。

思い出は昔の儘の天の川

五十四年の人生を西に東に旅をしたが朝鮮、満州、中支、関東、関西、何処の土地から眺めた天の川も此の同じ川であった。

青雲の志を抱いて、若い血潮をたぎらせた時、しっとりと夜露にぬれて露営の夢を結んだ時、失意の空に、得意の空に、私は天の川をもっとも意識して眺めてきた。

けれ共五十四年の今日唐津の一角でこうして天の川に見惚れるなどは、それこそ、全く予期しない偶然の出来ごとである。

終戦と言う転機がなかったならば私は唐津と言う名前さえ知らずにすんだかも知れない。

終戦の間ぎわ朝鮮の平壌に召集されて刻々変化する敗戦の報にどんな郷愁の念を抱いていた事か、まだ満足な生活ではないが、引揚の際命さえ有れば何とかなると希った十六年前の天の川に比べれば家内中達者なのはまだ感謝すべき事だろう。

但し私は今右手が利かずに困ってはいるが。

★

国産品愛用時代

紅原綺史朗

国産品優先使用によって、国際収支悪化を防げという声が高まっている。

先進国との競争もますます激化するであろうし、貿易の自由化に政府も業者も安閑としておられなくなったことは事実である。

消費都市では率先して、この国産品愛用運動を強力に展開していくことであろう。現に大阪でも東京でも「標語募集」によって、この国産品愛用を呼びかけている。

関西のトップを切ってN新聞が「国産品愛用標語」を募集したが、特選一名、入選五名のうち、三名までがわが不朽洞会員によって占められたのである。

特選

身のまわり国産ずくめのニューモード　不二田一三夫氏作

入選

遠くより近くに良い品国産品　河井庸佑氏作

ジャパンのラベルは世界のレベル　安部立美氏作

安部立美氏は最近お仕事の関係上、川柳塔も句会にも名を出しておられないが、戦前から川雑系の人で、句会では新鮮な句でよく天位をとった好作家である。

氏は書道でもベテラン選者として、関西では重きをなしている人である。

川柳雑誌社
婦人友の会新春句会

日時　1月21日(日)午後一時
会場　中島小児科診療院楼上
大阪市南区三休橋南詰
西電話㈦三九八四
（大阪心斎橋南詰東へ入る約一丁右側）

兼題
「ひま人」　麻生葭乃選　三句
「展示会」　山川阿茶選　三句
「サンプル」　高橋操子選　三句
「本堂」　中島小石選　三句

席題　当日発表（二題）
会費　三百円（食費共）
投句だけの方は郵券三十円同封・〆切1月15日
（当日出句はお断わりします）
投句先　大阪市南区二ツ井戸町二三　山川阿茶

花地抄墨

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月十五日▼投稿先本社宛

本社 文化の夕べ（大阪市）

11月7日 午後6時
会場——関西会館

菊花かおる文化の夕べ——静かに句を作るよろこびを、みんなで分けあう楽しいひとときだ。

今ここで作った句が、活字となって永久にのこる感激は、句会へ出席してはじめて味わえることである。きょうもまた何句かが記録されていくことを思えばやっぱり休まずに出席してよかったとおもう。

まず戸田古方氏の柳話から、十一月句会がひらかれる。

〃不安な世相の中で〃と顧されて、豆秋川柳から氏の舌端が火を吐く。死の灰の恐怖をテーマに、今日的なはなしは私たちの胸をうつものがあった。（12ページ参照）

路郎主幹選の「数学」で八木摩天郎氏が、経験の豊富さにモノを云わせ堂々の不朽洞賞を獲得された。—八時三十分閉会。（F）

出席者—路郎・圭芹堂・静馬・舟遊・東天紅・八郎・松亭・瑞歩・十悟・文秋・正一・柳宏子・柳志・薫風子・紫香・古方・摩天郎・好郎・多久志・一瓢・尚史・栞・奈良子・菁風・いさむ・旅風・一三夫・水客・万的・客遊子・蕗児・恒明・すゝむ・夢虹・白柳・生々庵・愛論・庸佑・繁雄・いわを・阿茶・宏子・虔乃

兼題「数学」 麻生路郎選

数学で邪教も栄えバスもふえ しげ子
大臣になって数学の味覚え 清風
数学にはもろくデモには先に立ち 大然
数学はよわいが汚職別らしい 一鶴
数学の誤算政治へ罪をきせ 八九寸
算数のきらいなだけが俺に似て 一ン十
あんのじょうスター数学苦手とか どんたく
回答はプラスアルファを出し渋り 牧人
数学が不得手八百屋のあとをつぎ 照児
数学が嫌いで先生まで嫌い 庸佑
数学者らしい眼鏡の底光り 阿茶
数学が出来ておやじの後つがず 客遊子
数学学を麻雀だけに役立せた 蕗児
数学が月の裏までみせてくれ 圭芹堂
いつもの通り数学でけりをつけ 白柳
数学で説いて納得させた事 故松亭
数学は苦手株では穴を当て いさむ
数学が出来ぬを自慢のように言い 庸佑
数学のない大学へ行きたがり 多久志
数学はアースの生命知っている 旅風
数学によわいおかっぱ爪をかみ 喜仙
幾何知ってよけいに理屈多くなり 菁風
ねずみ算読めないような教になり 夢虹
数学を生かせるイスにまだつけず 柳志
数学は大学出たと思われず 喜仙
妥協がないから数学が好き 水客
数学に弱い社長でお人好し 紫香
日本で食えず数学渡米する すゝむ
核実験神の計算せざること 旅風
数学の答だけ合うカンニング 尚史
数学が出来ずでっかいコネを持ち 客遊子
数学を知らぬ社長のかんに負け 正一
数学に弱いが女をよく欺し 多久志
ことりともさせぬ数学教授室 薫風子
数学に父の権威はなかりけり 摩天郎

兼題「腹」 西尾栞選

腹が出ていてバーの払いを持たされる 牧人
太っ腹ここぞと女に笑顔見せ 句念坊
腹からの悪党でない証拠の瞳 野迷路
腹いせに夫の枕なげて妬き 大然
腹立ちが自由に出せる地位となり 清風
腹が立つシミーズ脱いだとこ見られ 重子
腹ちがいの兄が乗ってる自家用車 生蓋
同じ腹こうも違った子が生まれ 阿茶
マダム今日人のおなかの後仕末 古方
こけしになっても狸は腹を出し 柳宏子
下ッ腹撫でて落付いてるナと思い 柳志
腹にないうそも聞いてるくすぐり 舟遊
産み月の腹をかかえて借りに来る 東天紅
遺産わけまた腹ちがい一人ふえ すゝむ
腹切って済むなら苦労はしまいもの 柳志
ライバルの腹を知りたい酒をつぎ 好郎
やり手とも言われ腹黒とも言われ 摩天郎
用心棒腹を切られるはめになり すゝむ
腹が出て男さかりを意識する 万的
船腹の豚で工員昼にする 夢虹
恋していてもめしときには腹がへり 多久志
あぎやかな腹芸鮎も古稀近く 柳宏子
腹の虫押さえかねてる煙草の火 瑞歩
腹の虫おさえおさえて宮仕え 愛論
人形の腹面白い子と遊び 一瓢
腹一杯食うまで待っている叱言 一三夫
貧ゆえに腹の底まで見すかされ 薫風子
腹這いになって女のふてぶてし 水客
宵寝して善人の腹押さえとく 舟遊
腹割って男の話に酒があり 菁風
腹が出て来て世の中おもしろし 水客
黙っていれば腹のある人にされ 柳志
腹にまだ何かもってる電話口 愛論
満腹になれば子供は去ぬと言い 生々庵
腹割って話そう等はおかしうて 一鶴
二号の腹かりた跡目を大事にし 栞
狂言の腹立ちトンと腹立たぬよう 栞

兼題「作業衣」 川村好郎選

作業衣の父は家とは別な人 句念坊
だぶだぶの服に夢あり見習工 正一
作業衣を脱いで趣味あり恋もあり 十悟
写真では作業衣みんな笑ってる 蕗児
嫁貰ろてからの作業衣稲が利き 多久志
作業衣の汚れが目立ち社はブム 一瓢
作業衣を脱いだら主義を曲げぬ人 水客
人並みに作業衣だけは汚れとる 静馬
作業衣のあくびはいやな眼で見られ 万的
作業衣の喋れば喋る口を持ち 水客
作業衣のはころび縫うも妻の幸 奈良子
作業衣の帰りは背広自家用車 喜仙
作業衣の下ネクタイの若い色 多久志
社長室作業衣のあるたのもしさ 栞
作業衣の疲れへ軽く子を抱え 多久志

作業衣の似合う社長で苦労人　一鶴
作業衣に折尺さして隙がなし　薫風子
作業衣の埃はたけば月三更　栞
上衣だけ作業衣で来た視察団　万的
作業衣で来て開通の押釦　柳志
作業衣をぬいで職長のさばけよう　すゝむ
作業衣で社長も平の部署につき　生々庵
作業衣のまま安産へ飛んで来る　圭井堂
御下問へ作業衣つぎをあてたまま　古方
盲判はつかぬ専務の菜ッ葉服　柳志
お茶をのむだけの社長の作業服　生々庵
作業衣は汗だく梅のないくらし　恒明
作業衣の誇り捨てたか革鞄　すゝむ
ご機嫌はななめ社長の作業衣　好郎

兼題「地図」　菊田いさむ選

丁寧に地図まで入れて案内状　蕗児
社会情勢の話へ子供の地図を借り　万的
地図通り谷川へ出た声になり　好郎
名刺の裏の地図でえらい目に会い　恒明
事故現場地図まで掲せて夕刊紙　しげ子
市長室十年先の地図を書き　牧人
地図だけをのこし移転の左前　照児
観光地図ジャンジャン町も載っており　尚史
分譲地の地図にタバコ屋と牛乳屋　万的
応接間大きな地図がかかげられ　紫香
台風の進路の地図にわが家あり　一三夫
連休が近づき地図を買うて来る　菁風
地図書いてやった使いのおそい事　阿茶
地図一枚若さが山へ挑ませる　蕗児
駅まで十分地図に直線引くなれば　一瓢
困ったら来いと先輩地図を書き　一三夫
レジャーレジャー温泉地図を拡げて見　愛論
地図見ればこんな小さな国がこそ　一鶴
渡された地図のポストが見当らず　生々庵
地図にない我が故郷はこのあたり　多久志
駅前の地図ほど大きくない菓子屋　万的
家探す略図縦にし横にし　栞
藁草屋で聞けば判ると地図をくれ　生々庵
菊大輪むかしの地図をなつかしむ　水客
ひやひやひやひや五十メガトンの下の地図　一瓢
愛用の地図も入れとく子のひつぎ　阿茶
地図書いて渡したらあこなら知ってます　白柳
商魂は名刺の裏が地図になり　多久志
商用の大阪地図がまた変わり　いさむ

席題「相談」　西いわを選

相談に乗ろと気安う貸しもせず　文秋
相談相手は貴方だけよとおだてられ　繁雄
相談に乗せてくれよともうけ口　文秋
年頃の相談相手に寄って来る　万的
わるい時だけは相談もって来る　一三夫
相談をうまく逃げられている落目　いさむ
顔ぶれを見て相談はひかえとき　恒明
相談なら素面で来いと断られ　柳志
飲む相談すぐまとまったみなみの灯　夢虹
相談へどこも同んなじ事を言う　菁風
金のことやないネンと相談に来　多久志
瀬戸際の相談おいそれとも乗れず　柳宏子
出たり入ったり相談まとまらず　古方
相談をしたとは形式だけのこと　客遊子
相談をすればええよにせえと言い　尚史
相談があるとは無心言うつもり　尚史
相談のはんまのとこから酒にする　生々庵
相談に来たのに喧嘩して帰り　多久志
泣きながらする相談でひまがいり　菁風
相談に乗って呉れたは野心から　圭井堂
押しつけるのに相談というよい言葉　白柳
まあ耳貸しなはれと相談いい話　恒明
相談をするあてもなし遺書となり　奈良子
相談に乗ってうかうかひっかかり　いわを

席題「無性ヒゲ」　吉田圭井堂選

無性ヒゲの方が私服の刑事なり　好郎
座り込み目やにもつけてる無性ヒゲ　柳宏子
無性ヒゲあたりかまわぬ声を出し　すゝむ
無性ヒゲよけいみじめな顔になり　柳宏子
連休を子守していた無性ヒゲ　静馬
新婚三日目もう無性ヒゲをはやし　夢虹
原稿はまだ渉らぬ無性ヒゲ　すゝむ
病床に居ても気にする無性ヒゲ　静馬
無性ヒゲ後へ下がって撮される　いわを
無性ヒゲなでて留守居のひとりもの　愛論
喪の旅にふさわしくいる無性ヒゲ　水客
抜く快感がうれしくて無性ヒゲ　古方
無性ヒゲの方が魅力のある若さ　夢虹
BGの口にのってる無性ヒゲ　庸佑
無性ヒゲ髭のこす気に変わり　十悟
無性ヒゲ第一ボタン外れてる　薫風子
ムードなどどうでもよいと無性ヒゲ　文秋
銀行へ泣きつきにくる無性ヒゲ　白柳
無性ヒゲで来れば女将にからかわれ　万的
いかにもやりてらし無性ヒゲはやして　蕗児
ボクサーが縁起かついで無性ヒゲ　瑞歩
痛くない腹さぐられる無性ヒゲ　恒明
たまにひげ剃ればかみそり負けをする　一瓢
無性ヒゲ賛成だけはしとくなり　紫香
いつの間に好きになったか無性ヒゲ　奈良子
たまに剃るヒゲヘデートと感付かれ　尚史
自転車で通うてからの無性ヒゲ　菁風
無性ヒゲそれば間抜けな顔になり　尚史
ジンクスと記事にとられた無性ヒゲ　松亭
惚れられて困るさかいと無性ヒゲ　十悟
無性ヒゲ剃れば威厳のない男　一三夫
デートすんで今日はゆっくり無性ヒゲ　生々庵
無性ヒゲのままで幹事のぎわしそう　柳志
倦怠期無性ヒゲにも腹がたち　愛論
銀行はどうせ貸すまい無性ヒゲ　一瓢
無性ヒゲまだ金縁りのメドつかず　好郎
無性ヒゲ医者が許さぬせいにする　生々庵
無性ヒゲはやして暇を持て余し　十悟
ボスが判押して連れ去る無性ヒゲ　圭井堂

席題「安物」　金井文秋選

お買物上手と安物つかまされ　生々庵
実用向きというはめ方ですすめられ　栞

全出席者（十一月現在）

路郎・愛論・文秋・一三夫・蕗児・柳宏子・阿茶・静馬・舟遊・庸佑・薫風子・宏子・霞乃

天位受賞者

⑨一三夫⑥水客④圭井堂③恒明・南宗・正一・すゝむ・多久志・紫香・②生々庵・雅堂・栞光・静馬・阿茶・柳宏子・文秋・白柳・①鵜汀・進之助・梨花・柳志・黙平・舟遊・万的・牧人・潮花・古方・蕗児・梅志・夢虹・眼子・水洞・真砂・狂二・晃・清人・賀峰・薫風・春果・麿天郎・一鶴・奈良子・十悟

不朽洞賞杯受賞者

⑧一三夫②水客・正一①鵜汀・南宗・菁風・麿天郎

安物でええわとダイヤせがまれる　圭井堂
折目縫目に安物というズボン　白柳
安物で一つぱし流行だけは追い　すゝむ
安物でよいと数だけいる湯のみ　松亭
イミテーションの方が胸を張っている　庸佑
おみやげは安物でよい食べざかり　愛論
値のことは言わずつかまされたを怒り　柳宏子
ええ方をすすめりや安物おまへんか　尚史
旅へ来て安白粉の三味に酔い　一三天
口振りはもう安物とにらんで居　恒明
安物が残って育つ庭の菊　舟遊
安物もええしがすると高こう見え　菁風
祝い返しする安物が見当らず　一瓢
安物をズラリ並べて特価デー　旅風
盛り場で出会い安物着るひけ目　白柳
母なればこそ安物でよいと言い　正一
安物をもったいぶって置いて去に　客遊子
安物でこんなによろこぶ妻であり　夢虹
磨いても拭いても安物らしい艶　柳宏子
安もんとちがう証拠に値札見せ　静馬
安物を承知それでも愚痴を言い　十悟
安物にばかり女房の眼が動く　恒明
安もんでんネ安もんでんネと見せたがり　多久志
お金持ちだから安物でも通り　一三天
悪いとこない安物を不気味がり　庸佑
うかうかと又安物へ手がのびる　紫香
安物も見せてお客の気をそそり　文秋

（庸佑清記）

雑川　阿倍野支部句会（大阪市）

金井文秋報

受付の顔が云うてる好景気　正一
受付がじろりとにらむ眼鏡越し　葉光
定休と知らず素通り気を使い　梅里
ムードだけ嗅いで銀座を素通りし　生薑
素通りをされて淋しい左前　柳宏子
素通りを叱られそうで振り返り　文秋
蒸し返し民警戦の釜ケ崎　樹峯
手がかりは破目をはずした使いよう　喜仙
いろは順と書いて言訳してるよう　唯義
いろはさえ知らぬ子供が経を読み　双楽
いろはから習えと我流反古にされ　十悟
ネジ一つ女世帯で持て余ましし　良
ネジ巻いてラジオの時報一寸待ち　堰子
ネジ巻いた数だけ踊るピエロなり　小松園

雑川　淀川支部句会（大阪市）

木村水堂選

釜ケ崎大人の口をきく子供　生薑
子供等に自慢の出来ぬ世相なり　水洞
帯しめて立てば大人の線になり　三十郎
母の瞳に胸の起伏も大人めく　慈楼
酒タバコそろそろ大人の馬鹿をまね　花村
事故現場可愛い運動靴が飛び　幽谷
名勝も古蹟も素通りの団体旗　六竜子
素通りへ暖簾がゆれる気がゆれる　礼司
素通りをすればするほど高い敷　一鶴
素通りをするには惜しい縄のれん　東洋男

雑川　にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

上げ潮にぐんぐん乗っていく若さ　晃
下り坂奥様じっとして居れず　満潮
あきの風チャプリンの髭のない顔に　葉平
注文がとれたか服屋ひくく去に　良
発註の電話と知って声を変え　敏子
注文をつけて縁話がこじれて来　漣
内証の旅ホッとさす発車ベル　生薑
旅しても土産がなければきょうざめだ　慎太郎
クーポンの旅は西日の射す旅館　柳志
赤字線ごとりとゆれる独り旅　保美
大志抱く旅はこっそり夜を発ち　清人
旅に出て一と時家を忘れたし　白柳
毀れてるおもちゃで床屋あやしてい　梅志

雑川　玉造支部句会（大阪市）

西出一栄報

爪先に生活の糧が黒く染み　柳宏子
心臓を抱えて遅刻詫びている　有岡
時代には勝てぬテレビへ紙芝居　井平
倖せな紙よお前は一万円　清子
起き抜けの虚をつき税吏やってくる　文秋
記憶にはないが慌てて返礼し　守信
おばあちゃんの記憶顔を一寸赤くして　一栄
初恋と亡母の記憶は似て消えず　正一
暁方の夢が記憶をまぜかえす　白柳

雑川　ハワイ支部句会（ハワイ）

築山快夢起報

金策の苦労つづきで世を終り　銀水
吹きすぎて金策の手を見すかされ　平八郎
月末が来て金策にまた追われ　紅茶
金策へ明日はあしたの風が吹く　泉水
金策に尽きて女房を里にやり　あき坊
金策へあれもこれも頼りなさ　万里歩
金策で建てたハウスも披露宴　呆児
金策はみんな女房に任せとき　エス子
金策も高説拝聴で引下り　緑星
金策に家内も顔も借って来る　紅溪
金策で質屋と茶の間首をしめ　周防
地価が眠っているよ金策威勢よし　笑有
金策の上手を初代不思議がり　美潮

食品と科学

食品と原資材・機械・包装の総合誌

12月号発売中　150円（〒18円）

特集
ハム・ソーセージの現状と将来
ハム・ソーセージ製造上の問題点
食肉製品の添加物について
ハム・ソーセージ製造と包装について
ハム・ソーセージの香辛料の現状と将来

講座
食品官能検査 ⑧
食品工場の衛生 ⑦

◇海外ニュース　◇特許ニュース
◇意匠ニュース　◇商標ニュース

〔展望台〕主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

大阪市北区
堂島町5
電話 9373～4

食品と科学社

振替 大阪6702番

金策で不仲となった友もあり　玉屋
月末の金策もせず昼寝する　美津子
金策に疲れ世相にわだかまり　内海
大吉のみくじ金策出来もせず　弦月
金策の弗に成功日本晴　拝山
金策は相手の愚痴にも耳をかし　須磨子
金策は出来ず菓子折だけ取られ　柳葉
足音もかるく金策出来たらしカロ女
金策が出来ず逃した大儲　浅太
金策に歩いて我の甘さ知り　細香
社長とは名のみ金策に追われて居　暁舟
金づるを見つけゴルフがやめられず　快夢起
金のため義理に嫁いだ浪子さん　萩路

川雑　**岡山支部句会**（岡山市）

浜田久米雄報

改札を出る重箱が邪魔になり　流風
金出して食べるお茶漬よその味　飴ん坊
踏切へ佇つ放心へ子が浮び　賤女
まだ惜しい古着を罹災地へ送り　胡風
二号また変ったサービス考える　幽谷
倖せに妻の座にありのり茶漬　治郎
鼻唄で質屋へ入れた腕時計　陽子
漬あみの茶漬に瀬戸の海匂い　葵丘
唇の薄さ饐舌見てとられ　雷山
茶柱を立ててサービスしてもらい　久米雄
ラッシュアワー改札掛は目できばき　凡平
団体の疲れ足音長うなり　博
お茶漬を食べて作戦練り直し　旭泉子
踏切で地蔵古びたまま無事故　佐加恵
腕時計きょうは他国の時報聞く　正一
踏切を恐がる牛の尻を押し　一声
古着屋は事件があったなと感じ　蛙柳
改札でパンチで列をちょん切られ　麦太楼
踏切で冷汗かいて止りだし　輝次
演壇に立てば唇乾いて来　哲郎
古着でもよい倖せの燈がともり　秋月
青い目の客も茶漬の味をしめ　淡水
唇もそめずわが子のために生き　三平

川雑　**浜寺支部句会**（堺市）

川村好郎報

天丼を見上げて同意しぶるなり　白柳
同意したしるしに孫を抱いてやり　裕邦
ゴールインしてから同意求めて来　静馬
押売りが留守と間違えるほど静か　末一
十代が静かすぎても気にかかり　美恵子
子無しの静かさもさびしいものうち　雄声
子供部屋しずかになった気味悪さ　きさ子
折込んだ姿音など聞えてず　圭水
好きの一言静かなとこでなお言えず　好郎
まだしこり残したまま朝無口　小石
朝刊がバサリ静かな夜だった　貴山
会場の前まで来たが静かすぎ　圭丼堂
もったいない静かさすぎて眠られず　生々庵
失言をお静かにではすまされず　操子
未練気に胸のあたりをながめてる　光江
別れたらいいとこばかり思い出し　凡子
断ちきれぬ未練をバルがぎき立てる　武助
二次会へ以心伝心勢揃い　八郎
台風が来るのに女房洗濯し　狂二
ライバルの肩をかりてる千鳥足　浩青
化粧にもライバルのある美しさ　東天紅

川雑　**大聖寺支部句会**（加賀市）

野村味平選

看板もはげて老舗で通る店　久雄
看板の下で記念の写真撮り　雅城
犬ばかり大事にしてと夫婦もめ　美代
犬連れの客を店員もてあまし　魯木
同じもの食べてやせる肥えている　光郎
あり合せですがと妻の如才なし　味平
残りものまず鼻先へ持ってゆき　酔羊

川雑　**京都支部句会**（京都市）

田中烏雀報

下剤かけられて淋しくなってくる　藻介
旅三日小さな町で買う下剤　尚平
腹ゴロゴロなるだけ下剤まだ効かず　生薑
軽薄と云う親明朗という息子　烏雀
軽薄を叱ってマダム飼育中　司郎
女房の呼声定期券がなし　紫蘭
気転きかしたつもりが呼ばれてる　禎一
潮風へ並ぶ英語で彫った墓　和三郎
一団の英語のうたへ口ずさむ　親生
蒼い目が澄んでジャパンのうそを聞く　真砂
物投げる下素な潮癒抜け切れず　絵丘
遺産にはあらず潮癒ゆずり受け　海三

川雑　**備前支部句会**（岡山県）

横山一声報

独酌で放っとかれてる倦怠期　明良
脛の蚊をたたき独酌まだ続け　伊久野
独酌の父の白髪が目立って来　あやめ
独酌はテレビ相手の留居役　輝次
独酌は頑是ない子にやりたがり　万女
独り言いう独酌は三本目　東岸
独酌の父いとほしくついであげ　賤女
誤解とけいうた言葉が恥かしく　一声
誤解とくその真剣さを認められ　米男
誤解した奥の不貞寝を持てあまし　胡風
また逢う日ジュースが終る頃さまり　久米雄
袋入りのジュースが野良へも届けられ　秋月
遠足の茶店ジュースがとんで売れ　竜泉

川雑　**広島支部句会**（広島県）

平田越舟報

庖丁の冴えがのれんとコイさんと　越舟
暴落が陽気な父ちゃん無口にし　昌幸
庖丁の音もとぎれる妻病む日　二三夫
巻すしを切る庖丁に水したたし　秀月
せせらぎの立てば素足に水が鳴り　美文
相場欄見るのがこわい株を持ち　弓路

川雑　**弓削支部句会**（岡山県）

直原七面山蕉

お蔦力の唱ぎ湯島の梅も老い　生薑
叱られて寝た子の汗を拭いてやり　たつよ
一年にハガキ二枚のお交際　美沙
認証式終えてテレビはスター娘　三四郎
流行の水着に見せた脚線美　しおり
どの顔も刑事に見える暗い過去　ごん太
年頃のなやみまぎらす高笑い　なみ
手枕で話の出来る古い友　天仁坊
アルバムの顔に喰い入る一周忌　芳仁
きびの葉がサラサラ初秋身にしみる　周甫
恋人の親から質問責めに合い　七面山

川雑　**米子支部句会**（米子市）

小西雄々報

放射能あろうが集金雨をつき　一机
保険屋は死人ばかりの噂をし　無閑
字引まで引いた新語をすぐ忘れ　素瓢
想出の場所を秋波もう洗い　一保
生きること考え秋の空に問う　天邪鬼
テレビより株へ打算の目が光り　ユリ子

閉寝に銚子を振って席を立ち　秀峰
台風の予報どおりに屋根が飛び　忠之
老らくの恋お灸などすえあって　千代
憎くらしく案山子にとまる群雀　清
声色も知ってる社内交換手　詩郎
黒枠に再起むなしく警らかれ　芋人
罹災者の再起を祈る寄附十円　布堂
再起するまでの苦労は秘めておき　節枝
再起する決意へ冷たい世間の眼　雄々

雑川　大鉄支部みなと句会（神戸市）

植村客遊子報

月が出ていて夜警にある安堵　白溪子
道問えば赤い瓦を教えられ　初甫
めしまだかまだかと宿の朝を待ち　客遊子
ロングヘヤー化粧し夜の巷ゆく　賀人
風にたおれた木を見つめてた鬼瓦　万的
めし盛りの女の腕の太さ見る　恵甫
洋間出来瓦の色も一寸変え　甲峰
通知簿に老眼鏡を添えて出し　美由起
ひげそりへこっそり妻の化粧水　千甫
眼鏡はずしてしんみり意見する心算　水客

雑川　高知支部句会（高知市）

大西迷窓選

お祭だ嫁いだ娘もう来よう　水源
夏祭り太鼓の音も又暑し　瑞利
大臣を氏子にもって夏祭り　博理
秋祭りゆれる轎の音もよし　松月
祖母も又昔を偲ぶ星祭り　論愚
祭り酒見合と知らず酔いすぎて　百合
日の丸の旗もまばらなり国祭日　柳窓
ここまでが氏子祭りの縄を引き　酔雀
味噌汁のぐにも政治の波がよせ　遊子
お味噌汁が煮えて皆が起される　省吉
猫舌に苦手な朝の味噌の汁　巌道
二日酔味噌汁ばかりで出勤し　窓花
名荷だけ入れた味噌汁旅の宿　秀峰
味噌汁にせき立てられる朝の床　喜楽
別れ住む味噌汁の味妻の味　和香春
二日酔妻なればこそ味噌の汁　呑洋
味噌汁が朝の家庭の和を作り　波浪
味噌汁も冷えて寂しい寮の朝　利子
味噌汁を朝戴いて行く仕事　松竜
味噌汁の旨さ元気に朝を出る　俊一郎
悪口は自分のこととひかえとき　忠男
悪口も認識された一分の利　政史
悪口も程度がすぎて少しもめ　木精
悪口のとこだけ声を小さくし　久江
親方の悪口へ親方ひょっこり来　蟠蛇
親戚と知らず悪口まくりたて　平男
悪口を云い合い乍ら好き同志　百日紅
悪口に合槌打てぬことがあり　砂丘
老妻の悪口それ程苦にならず　柏子
思いやりすぎて悪口云われ出し　緑山
悪口の底にひそんでいる嫉妬　美知
多弁すな蚤のまゆの美しさ　勝景
悪口を云うお化粧がくずれかけ　迷窓

雑川　土佐支部句会（高知市）

川竹松風報

押し売りの偽学生に居直られ　勝子
制服を脱ぐ日和服がよく似合い　寛
故郷の雨を角帽濡れて行き　正祐
学生にしてはダンスがうますぎる　はる江
落書をさけた娘の赤い顔　朝香
落書をしたのはとうに逃げており　常香
落書をさしてデパート儲けとり　勝喜
落書を消しておやつがやっと出る　利子
信用はゼロ女には愛される　康之介
まだ処女でいます誇りの不倖せ　紅樹
保険を二号の方が掛けていた　松風
化粧する素肌がすだれ越しに見え　古城
指定席気になるように二つ空き　竹比呂
仲直りしたいに邪魔な第三者　康平
あでやかに匂えどバラのトゲをもち　かずえ
友達が去んでおやつの時間にし　耕生

南海電鉄川柳会（大阪市）

辻圭水報

おとなしやかめつく押した娘と見えず　八郎
ふろしきの子猫に泣かれた車内の眼　宏子
手持ぶさた車内のビラとにらめっこ　山岡
混み合って車内誰れ彼れスリに見え　句念坊
適合は車内をこんなに明るくし　圭水
車内まで睦まじさもってきた夫婦　みなづき
声高に儲けた話する車内雄声
一円を見過している車内の眼　路郎

帝化川柳会（大阪市）

谷沢好祐報

二次会の後は底抜け一人だけ　一平
靴下もはかせてくれる姉女房　九柴
遊ぶなら遊んでおいでと姉女房　長始
姉女房だから夫が気楽過ぎ　雄水
姉女房亭主を褒めてほめて無事　白水
姉女房激しい恋の果らしく　好祐
年寄りの手習い停年から始め　繁三
例外にされて奈落の底で生き　雅堂
一合の酒に苦情を封じられ　京一楼
苦情一つ云わない姑に骨が折れ　晴暉

富柳会句会（富田林市）

阿部柳太報

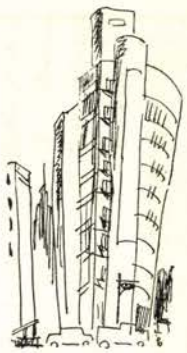
アルバムの写真はがして嫁ぎ行き　周一
いにしえの罪な写真がものを云い　勇三
社長さん家ではウスイという噂　とも子
噂では処女であったりなかったり　八郎
噂だけ聞けばガメつい社長なり　紅月
立聞けば社長は秘書に甘い声　美代
立聞の顔繕うてドアを開け　尚史
立聞を尾にひれつけて女中部屋　六竜子
立聞けば不足たらたら云うてはる　摩天郎

コクヨ川柳会（大阪市）

川口理休報

見て頂戴自前ですねん身をつくり　亀心
メニューよりさいふの内見て注文し　義広
超然としても近所がはっとかず　留鈍
顔知らぬ近所の人に嫌香し　ほたる
なかなかに酔わぬ酒なり自前なり　瑳巳
お月さまようこそ街は停電だ　理休

酌よし　千日前大劇裏
TEL(63)二七一〇
味よし　アベノ橋近映地下
TEL(77)〇一四七
梅里の店
大萬
★大万川柳（第百三十回）を募る
兼題「夜更かし」　路郎先生選
締切・十二月十五日　五句以内
発表・十二月廿日　（店内掲示）
投句先　阿倍野区松崎町三ノ一〇
大万川柳会宛



柳樽室

路郎生

★寒い十二月になった。大阪は他所と違って多少暖かい方かも知れぬが私には苦手だ。

★本号で本年も十二月号を重ねた。これも寄稿家や愛読者諸氏のご協力のたまものに外ならない。厚く厚くお礼を申し上げる。

★下半期は予想以上に忙がしかった。その内でも川雑川柳祭、大阪市の文化祭、関西短詩文学連盟の作品展などは微力な私にとっては大きな重荷だったが、何れも盛会裡に責任を果し得たことは望外の倖せだった。ご支援下さった各位に厚く感謝の意を表したい。

★川柳界は相撲や野球のように瞬間にして勝敗が決するものではない。事志とたがい、つまずく人たち、つまずいた柳誌を乗り越え、乗り越えして、はて知らぬ前途に向って闘いを続けねばならないのであり、しかも至って地味な仕事であることを想起され、何分のご支援をお願いしたい。

★本年は不朽洞会から中島生々庵氏、河村瑞川氏が欧州へ、牟田一哲夫妻がアメリカから欧州へ外遊されたが、一九六二年には若本多久志氏が、一月二十一日の日航機で羽田を飛び立ってハワイに行かれることになった。嚢には故尾崎方正、河村日満氏、足立春雄氏等が外遊され、柳眼による見聞をひろめられたことは同慶にたえない。川柳が世界的になる日も近いことであろう。

柳人交歓年賀広告を募る

新年号へあなたの年賀広告を

★一口金二百円。幾口でも申し込んでください。

★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。

★一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月十日着便。

★広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）

川柳雑誌社

★本社句会を新春から、千日前の自安寺に変更した。関西会館は静かで、いい会場だったが、少しく広すぎたので夏は涼しかったが冬向きでないのと、都心から少し東寄りの嫌いがあるので、又々ミナミに戻ったわけである。こんどは設備も完備しているので、ご満足が願えるのではないかと思っている。新年句会は案内状遅配を見込んで一月十三日午後六時から開くことにした。処は市電千日前電停東入る北側である。

★明治、大正、昭和にかけて、創作活動を続けて来た大家や中堅が、年々櫛の歯がこぼれるように他界した。僅かに生き残った大家も、その創作には見るべきものが少ないように見える。これはやむを得ない自然の数ではあるが、その指導力だけは過去の経験を生かして柳界将来のために奮起してもらいたいものである。一九六一年を送るに際して大家諸君に特にお願いして筆をおく。

・ペンの散歩・

▼1961年のフィナーレを「スト特集」で飾った。東野大八氏の「軍隊でストをした男」など、神国日本時代なら、活字にできないものだけに興味ある読み物である。ペンの自由だけは、ありがたいご時世だとおもう。

▼編集に関するご意見を毎号いただいているが、できうる限り、皆さんから愛される雑誌へ編集局は努力します。

▼高校中退の少年へ、何千万円という大金がバラまかれ、今年もストーブリーグをにぎわしているが、一億人に一人か二人の天才児だ、何もゲンクソわるがる必要はないとおもう。それだけの力を持って生まれたのだから買い手の球団もその実力に応じた金額で迎えるのが当然ではないか。この天才少年は、他の少年たちがタコ焼きを食ってるまもボールを投げて勉強しているのである。一筋に、とにかく勉強している人には敬服する。

▼11月21日小雨降るなかを気の合った友とフラリ南河内河内村の弘川寺を訪うた。西行終焉（えん）の聖地だが、ここでバスを待つ間、弘川寺の高志浄観師から西行似雲両法師の遺徳をきく機会を得た。晩秋—時雨—夕暮れ—歌聖入寂の地をバスで帰ったが、西行が修法と諷詠を無為楽として、ここに山居していたころがちょうど路郎先生と同年配だった。

（一三夫）

酒 清

灘・魚崎

大塚合名会社醸

十二月の句会—川雑支部

★宇部句会・3日（日）一時半、題、急所・櫂・ストーブ・掛取り所、宇部市東区恩田長沢市住津秋六花居、★明和研究句会・3日（日）一時、題、思惑・ボーナス・顎、所、阪神鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★淀川句会・5日（火）六時、題、売れ行き・赤旗・隣、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、★玉造句会・11日（月）七時、題、回顧・雑踏・飾り・ビラ、所、市電玉造電停南百米大阪信用金庫、★かがみ句会・2日（土）夜、題、得意・目標・触れ込み・年上・十二月、所、池田古心居、★米子句会・10日（日）一時、題、魚・奥さん・法事、所、西伯町役場会議室、★にしなり句会・17日（日）六時、題、渦・ブレーキ・無題、所、玉出新町通一ノ一一後藤梅志居、★京都句会・16日（土）夕、題、薬局・火・逢う、所、四条縄手仲源寺、★阿倍野句会・20日（水）七時、題、手ほどき・たたり・風向き・行きずり、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大萬、★南海電鉄句会・21日（木）六時半、題、前売り・抗議・お知らせ、所、難波高梁下親和クラブ。

麻生路郎著

新川柳鑑賞

川柳の味い方・五百数十句

価二五〇円
送費八〇円
B6版
二五〇余頁

（毎日新聞評）
麻生路郎さんは明治三十七年から川柳を手がけているというから川柳歴はもう五十五年にもなる。
この新著は麻生さんが毎月出している「川柳雑誌」に掲載されたものを中心にその他の雑誌や句集からひろった五百六十三句について、ひとつひとつ丁重な注釈を加えて、鑑賞の手引に資そうとしたものである。句の方より実はその鑑賞文の方がなかなかうがっていて、一気に読ませる魅力がある。

東野大八著

風流

人間横丁

B6型　二五八頁

価 250円
送費70円

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックバランな人生批判が、その雄筆からほとばしるさまは凄い。まるで腕の冴えた板場の切れ味にも似ている。★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

若本多久志著　麻生路郎序

川柳

親ごころ子心

価 150円
送費50円

「川柳雑誌」の川柳塔及び近作柳樽の中から親ごころ子心を詠った秀句を多年に亘って根気よく拾い蒐めたのが本書である。登載された柳人三百余名、集句二千余は親と子の愛情が如何に深いものであるかを知ることの出来る、実に有意義な書である。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。（切手代用可）

発行所　大阪市住吉局区内万代西5丁目25　川柳雑誌社　振替口座大阪75050　電話 大阪 ㊐6081

新製品

インキが見える…
クリアー・アイ
パチロッドスーパーV
スペアー6本付 ¥1.000 ¥2.000

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも　心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

募集

課題吟募集

音痴（十句以内）若本多久志選
テーブル（十句以内）野村味平選
長話（十句以内）伊達堰子選
午後（十句以内）小川恒明選
男（十句以内）広津柳慶選
割箸（十句以内）橘高童風子選
（毎月十五日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠十句以内）北川春巣選
文章（評論・研究・感想其他）麻生路郎選
（毎月十五日締切）

投稿規定

▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼「近作柳樽」は一般作家の雑吟を募る。
▼「課題吟」は誰でも投句が出来る。
▼「川柳塔」の投句は不朽洞会員に限る。

Printed in Japan

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　三十六年　第十二号
定価　九〇円（送料六円）
（禁転載）
半カ年　五七六円（〒共）
一カ年　一、〇八〇円（〒社負担）
昭和三十六年十一月廿五日印刷
昭和三十六年十二月一日発行
大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人　麻生幸一郎
大阪市住吉局区内万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話　大阪㊐六〇八一
振替口座大阪　七五〇五〇

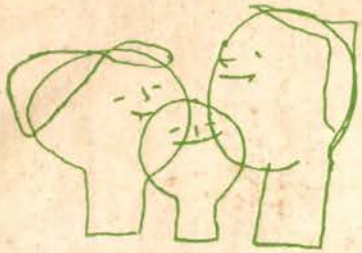
昭和廿二年七月一日　第三種郵便物認可
昭和廿八年十一月一日　第三種郵便物認可
毎月一回一日発行

編集兼発行人　森生象
印刷人　森生象

発行所　川柳雑誌社
大阪市住吉区南方町西五丁目三五番地
電話大阪七五〇五番

定価九十円（送料六円）

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬莱

大阪なんば・TEL ㊥551－2

万人
その名を知り
万人
その味を賞す

世界の名酒

サントリー

オールド　1,600円・角瓶　1,250円　洋酒の寿屋

麻生路郎先生著

川柳とは何か

価　二五〇円
送料　七〇円

—川柳の作り方と味い方—

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所　川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27　振替東京29507

あみ上りのよさ

スキー毛糸

落着いた、深みのあるスキー毛糸の色はツートーンのセーターやカーディガンに最適です。今年もスキー毛糸で皆様の個性美を活かしましょう

倉敷紡績株式會社